

Shihon shugi no karakuri

880-01 Yamakawa, Hitoshi, 1880-1958

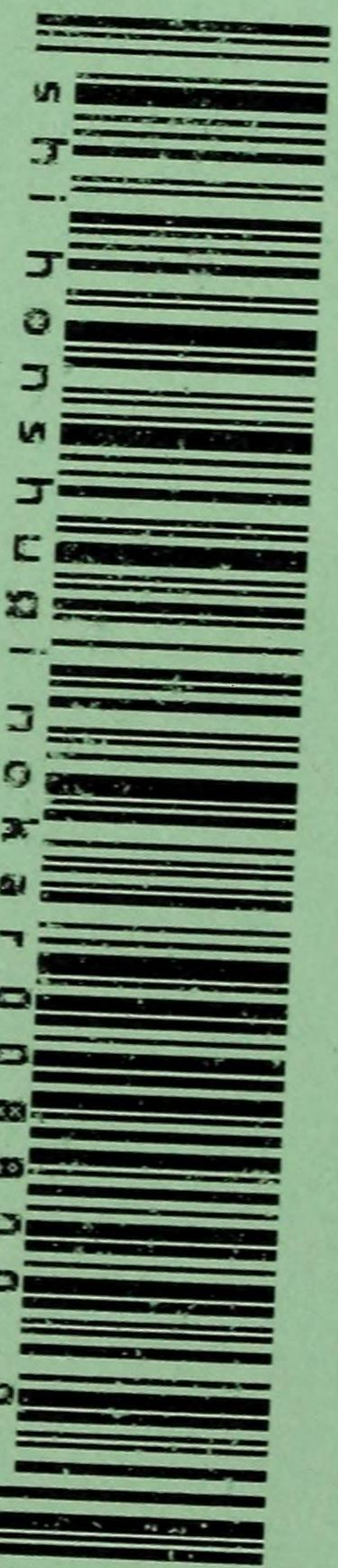
12002511

Library of Congress, Asian Division

I2111 shihonshuginokar008800_0

00202086627

Jan 14, 2014



3-5004

1711

資本主義

のからくり

改訂版

山川均著

内務省警備局保安課

P. 6

Yamakawa, Hitoshi

函	P 84
架	690
保	
安	
調	
度	

改訂版

資本主義のからくり

山川均著

1926

建設社

内務省警保局保安課

HB501

.Y258

1926

Copy 1

Asian

Japan

Cage

日本主本資

山

山

山

山

99-429712

改訂版はしがき

大正十年の秋、少数の青年諸君に話をするために、私は或る地方に旅行した。その時の会場(?)は某市から十數哩はなれた深い森林の中だった。その頃は(今日ほどに文明が進歩してゐなかつた)見えて!)私のごさき穩健な考へをもつた者でも、いくらか危険視せられてゐた。そのために私の話を聞いたさいふだけのことで、これ等の人々が職業を奪はれる恐れがあつた。

二三十人の人々は、思ひく、杉の木の切り株や熊笹の上に腰をおろした。私が二つの題目について話を終つた頃には、日はまつたく暮れて、話す者も聞く者も、互ひに顔が見えなかつた。

このパンフレットの内容は、その時の奇妙な講演會で試みた、二つの話の一つである。

その後これは雑誌『社會主義研究』に通俗講話として載せたのち、さらに『労働週報』に轉載され、翌十一年に僚友社の諸君により、パンフレットとして發行された。『資本主義のからくり』さいふ現在の標題は、その時、僚友社同人諸君によつて選定せられたものである。

それから今日までに十數版をかされ、もはや紙型が磨滅して、まつたく用をなさなくなつた。のみならず、本書の内容は、最初の講演を聞いた人々の性質によつても勢ひ制限せられてゐるために、私自

身にも、いろ／＼の點において不満があつた。そこで改版を機會に、全部に亘つて改訂を加へることにした。

しかるにいよいよ改訂に着手して見るに、本來の形を存しつつ、なほかつこれ等の不満を除く程度に改訂することは、さうてい不可能であつて、これは畢竟、全く別個のものを書き上げることに歸着する。そこで止むを得ず、初めの計畫をかへて誤記や誤植を正だす程度にとどめ、ほんの一二の箇所について多少の改訂を加へ、大體において不満足な形のまゝで再刊することにした。

これは私の遺憾とするところであるが、それと同時に、極めて不完全なこの小冊子も、不完全ながらも、啓蒙的な運動の上には、なほ多少の役立ちをするこゝと考へる。

大正十五年八月八日

著者

目次

(一) 資本主義の生産……………一

不思議な世の中——國民經濟學——利潤を得るための生産——

(二) 經濟組織の變遷……………五

人の罪か制度の罪か？——古い經濟組織と惡い經濟組織——原始時代の共產制——奴隸、

最初の搾取制度——農奴制度、緩和された奴隸制度——都市の發達と手工業——近代の機械

工業——經濟組織の進化する法則——マルクスの説明——資本主義はどうか？——

(三) 生産者と生産手段との分離……………一四

資本制度の特徴——機械工業とプロレタリアン——階級と階級との對立——支配と被支配と

の關係——資本制度の根本的矛盾——

(四) 労働力の商品化.....110

自由を與へられた労働者——資本制度は商品労働がなくては成り立たぬ——労働は商品に非ず?——

(五) 生産と消費との矛盾.....114

奴隸と労働者、賃銀奴隸制度——生産過多——經濟界の恐慌——國と國との戦争はなぜ起るか?——帝國主義——

(六) 資本制度の浪費.....118

強制的の怠惰——産業の豫備軍——經濟的の無政府状態——無益な品物の生産——必要な生産の制限——競争の浪費——商業の浪費——廣告費と販賣費——資本制度は不經濟——

(七) 人間浪費の制度.....126

よき社會の一條件——全ての人を商人化する社會——資本主義の社會は悪平等の社會——資本主義の社會は不適者生存の社會——

(八) 社會的生產と個人的所有との矛盾……………四三

個人的の生産と個人的の所有——生産手段は社會化した——生産手段の利用も社會化した——
——生産方法と財産制度との矛盾——

(九) 生産力と財産制度との衝突……………四八

失業問題は何を意味するか？——魔物と魔法使ひ——生産力の障害——資本制度の功罪——

(十) 私有財産主義の動搖……………五一

私有財産制度は比較的新しい現象である——私有財産觀念の基礎——労働全收權と私有財産
主義——労働全收權の原則にもとづく分配は不可能になつた——私有財産主義の觀念はぐら
ついて來た——國家と私有財産主義——新しい正義の觀念——

(十一) 社會生活の危険と不安……………五九

資本制度の下における生産の動機——民衆の生活は偶然の結果——資本主義的生産の目的に
かなつた行動——吾々はどんな事に覺醒してよいか——

(十二) 生活の改造……………三

思想の動搖は何を意味するか？——より善き生活への憧憬——生活改造の二つの道——個人の改造か社會の改造か？——

(十三) 自己改造の努力……………四

現狀擁護の人生觀——哲學と文藝とは現實回避の手段——哲學的思索は資本主義に順應する努力——理想生活のまごころ——片眼を明けて見た社會觀——

(十四) 社會の改造……………六

經濟組織の改造は不可能か？——糸車と紡績機械——お婆さんは糸車の永久性を信じてゐた——この變化は社會關係を一變した——經濟組織は變化する——

(十五) 鬭争の生活……………七

正義は變化する——正義は生活の條件と共に變化する——支配階級の正義と被支配階級の正義——新興階級の正義——生活は鬭ひである——

(一) 資本主義の生産

【不思議な世の中】 今から百年ほど前に、フランスにフウリエーといふ人があつた。フウリエーは若い頃、マルセイユのある穀物問屋に勤めてゐたが、或る日のこと、外國から小麥を積み込んできて、マルセイユ港に碇泊してゐた船から、輸入の小麥を海中に棄てる仕事の監督を命ぜられた。當時フランスは凶作のために小麥が缺乏し、多數の貧乏人はパンの代りに馬鈴薯を食ふてゐた。しかし穀物商人は、もつと小麥の値段をつり上げるために、輸入小麥を船中に匿してゐるうち、下積みの方から腐つたので、海中に棄てたのである。一方には食ふべき小麥のない多數の人々があり、一方には、せつかく輸入した小麥を腐らせて、海中に投げ棄てる。一體これはどうした事だらう。フウリエーはこの奇怪な現象を見て、現在の社會の組織組み立てのどこかに、間違ひがあるに違いないといふ疑ひを起こし、それから一生涯を、理想社會の研究に捧けたといふことである。

然しこれはわざと、百年前のフランスに往くまでもなく、吾々が日常見る目前の事實であつて、たゞ不思議なことは、人々がこの奇怪な事實に對して、フウリエーの起こしたような疑問を起こさぬことである。

【國民經濟學】

福田徳三博士の『國民經濟學講話』といふ本の中には、かう書いてある。

「……或年上海其他の支那市場で、人參の價が非常に下落しました……それで誰人の英斷であつたか知りませんが、此人參を仁川埠頭で焼却したさうです。人參は高價なもので一斤仙圓といふものを、徒らに燃やして仕舞つたのです。これは物といふ點から云へば、非常に勿體ない話で、藥にして置けば大變役に立つものを、ムザ／＼焼棄するのは冗なこと不經濟なことをする様ですが、それが却つて經濟に合つたのです。と申すのは仁川埠頭で何斤焼棄てたといふことを聞いたたら、數日ならずして上海に於ける人參の相場が回復して残つた物が高く賣れまして、安値で皆賣つたよりも焼いて仕舞つた残りを高く賣つた方が利益で大いに儲けたと云ふ事です……」

人參を服ませたくとも服ませられぬ人が澤山ある。その時に、せつかく出來た人參を焼き棄て

る。これが『經濟に合つた』道である。そしてかような經濟の道を研究するのが、『國民經濟學』といふものなのである！

ところが之とても、實は朝鮮三界まで往くがものはない。昨年（大正九年）の春あたりから經濟界の不景氣といふことで、七月中には全國にある三菱の倉庫だけでも、始末に困るいはゆる『滯貨』が十四億圓に上り、國民が日常品の暴騰に苦んでゐる時に、一億五千萬圓の綿織物は倉庫の下積みとなり、一億八千萬圓の砂糖は倉庫の中で溶けて流れてゐた。これはよく考へて見ると、フランス國民の多數がパンの代りに馬鈴薯を食つてゐる時に、船積みの小麥を海中に棄てたのと、全く同じ現象なのである。

【利潤を得る爲めの生産】 昨今は米國には六七百萬、英國には三四百萬の失業労働者があ
る。それならば生活の必需品が有り餘つてゐるために、爲すべき仕事がないのかと云ふと、決して
てそうでない。『露國には飢饉がある、然しながら英國には飢饉がある！』これ等の幾百萬の労働
者は飢餓に迫られてゐる。それならどしく生活の必需品を生産したらよきそうなものだが、事
實は反對に、労働者は働らきたくても仕事の口がない。

昨年きくねんの不景氣ふけいき以來いらい、日本にほんでも紡績會社ほうせきくわいしやは操業さうげふを短縮たんしゆくする。機織工場はたおりこうぢやうは閉鎖へいさする。そして多數たすうの勞働者らうどうしやは失業しつげふした。それならば日本にほんの國民こくみんは糸いとや織物おりものに有り餘あまつてゐたかといふと、決けつしてそうでない。それなら操業さうげふを短縮たんしゆくしたり工場こうぢやうを閉鎖へいさしないで、どしどし品物しなものを造つくつた方が國民全體こくみんぜんたいの利益りえきである。ところが却かへつて操業さうげふを短縮たんしゆくしたり、工場こうぢやうを閉鎖へいさするものは何故なにゆゑであらうか。云ふまでもない。生産せいさんしても引合ひきあはぬからである。即ち生産せいさんするよりも全く生産せいさんせぬ方が、また多く生産せいさんするよりも少すくなく生産せいさんした方が、資本家しほんかにとつて利益りえきだからである。今日の經濟組織けいざいそしきでは、生産せいさんは國民全體こくみんぜんたい、社會全體しゃくわいぜんたいの利益りえきや幸福こうふくを目的もくてきとして行おこなはれてゐるのでなく、資本家しほんかなり企業者きふしやなりの利潤りじゆんと收益しうえきを目的もくてきとして行おこなはれてゐるのである。そこで品物しなものを造つくらぬ方が、資本家しほんかや企業者きふしやの利益りえきとなる場合ばあひには、よし社會全體しゃくわいぜんたいの利益りえきと幸福こうふくとがいかにかにその品物しなものを必要ひつえうとしてゐるようとも、彼等かれらは直たゞちにその生産せいさんを中止ちゅうしする。それは丁度ちやうど、人參にんじんを賣うるよりも焼やき棄すてる方が利益りえきな場合ばあひには、人參にんじんを焼やき棄すてることが『經濟』けいざいであり、輸入米ゆにふまいを陸揚りくあけするよりも、腐くさらせて棄すてた方が利益りえきな場合ばあひには、よし社會しゃくわいの多數たすうが餓死がしして居をつても、小麥こむぎを海中かいちゆうに投なげ棄すてることに躊躇ちゆうちよせぬのと同じである。

(二) 經濟組織の變遷

「人の罪か制度の罪か？」これは一人々々の資本家または企業家その人が悪いかと云ふと、必ずしもそうでない。或人は奸商を征伐せよ、暴利を取締れと叫ぶかも知らぬが、今日の經濟の組織と組立ての下では、これが即ち『經濟に合つた』遣り方であつて、そのためには『國民經濟學』といふ立派な學問があり、澤山の偉らい大學者が、専門にこの遣り方を研究してゐるのである。そこで若し、こゝに博愛的な一資本家があつて、かような法則に反した事業の經營方法を取つたなら、この資本家は、直ちに競争に負けて事業界から葬られてしまふに違ひない。そこで問題は、一人々々としての資本家や企業家が善いか悪いか、彼等に公德心があるか無いかといふ事ではなくて、かような經濟の組織組立ては、善いか悪いかといふ事である。

【良い經濟組織と悪い經濟組織】 しかれば或る經濟組織をさして善いとか悪いとかいふ、善惡の標準はどこにあるかと云ふと、それはその經濟組織には、どれだけ有効に社會の全員

を養つてゆく能力があるか、又どれほど経済的に、社會の全員を養つてゆく能力があるかといふ
 つまりは能力如何といふことにある。即ち社會の全員を着せ、住まはせ、食はせる——即ち社
 會全體を給養する上に、能率の高い經濟組織は善い經濟組織であつて、能率の低い經濟組織は、
 悪るい經濟組織であると云ふことができる。そして大昔このかた、人間社會の歴史は、經濟組織
 がいろ／＼に變遷した歴史であるが、その變遷の仕方は、常に一層能率の高い經濟組織が、能率
 の低い經濟組織に代つて來たのである。

【原始時代の共産制】原始時代の人間が生活の資料を得た方法——即ち生産方法——は、主
 として天然の動物を捕まへて食物とする漁獵であつた。この時代には一人々々の人間の一日の勞
 働の結果は、やつとその人一人の生活を支え得るだけであつて、それ以上には、殆んど少しの剩
 餘をも生産しなかつた。したがつて他人の勞働の結果を横取りして生活するといふことは、した
 くとも出来なかつた。従つてまたそんな考へは、誰れの頭にも浮んで來なかつた。即ち他人の勞
 働の掠奪または搾取といふことは、この時代には不可能だつたのである。かように人間の生産力
 が極く低い時代には、たとへば他人を奴隸として働らかせてみても、たゞ本人たる奴隸自身の生

活資料を生産するだけであつて、奴隷の所有者——主人——には少しの利益にもならぬ。この時代がいよいよ原始共産制度の時代であつて、或人の云つたように、當時の共産制度は富の共産といふよりも、寧ろ貧乏の共有だつたのである。

【奴隷——最初の搾取制度】　ところが人間が天然の動物を飼養する牧畜を發明し、恐らくは動物の飼料となる牧草から穀草を發見して之を栽培するようになり、こゝに農業が始まると、人間の労働は、著しく生産力が増して來た。かうなると、人々が、一日の間労働すると、その人一日の生活に必要なものを生産した上に、尙ほ幾らかの剩餘を生産することになる。

人間の生産力が増加して、剩餘生産が出來得るようになると、初めて他人の労働を搾取することが出來得るようになる。そこで種族と種族との戦争で捕虜ができると、今までは殺してしまつてゐるたが、これからは成るべく活かしておき、奴隷として働らかせることになる。奴隷制度は、今日では何人もこれを是認するものはないが、それでも當時は、一そう進歩した生産の形態だつたのである。

【農奴制度——緩和された奴隷制度】　しかし農業が進歩して——即ち人間の生産技術が

進歩して——労働の生産力がなほ一そう増加して來ると、奴隸制度は漸次に不經濟なものとなつた。奴隸の労働は自由人の労働にくらべると、はるかに能率が低い。その上に監視の必要がある。アゼンスでは三十萬人の奴隸の労働を監視するためには、四萬五千人の奴隸巡查のほか、多數の武装した監視人を必要とした。ことに奴隸が社會に重要な生産力となつて來るにつれて、彼等もだんぐ／＼持主に反抗するようになった。そしてこの反抗は、初めには單純な突發的個人的のものであつたが、後には大衆的の反亂となつて、社會の秩序を危うくするようになった。そこで奴隸制度はだんぐ／＼に、緩和された奴隸制度ともいふべき農奴制度に變化した。農業の技術が進歩して、土地が主要の生産手段となるにしたがつて、土地資本主義ともいふべき封建制度が發達し、土地は大小の領主の掌中に集中せられた。そこでかつては一村で共有して居つた土地、ないしは自分自身の土地を耕やしてゐた農民は、いやでも應でも領主の土地を耕やすほかに、生活の道がなくなつた。これ等の農民は、もはや今までの奴隸のように、家畜同様の所有物ではなくなつたが、土地に附屬した間接の奴隸であつた。かように奴隸制度は農奴制度となつて、農民は半自由な労働民となり、労働の搾取も奴隸の場合よりは一そう間接的になり、從

つてそれだけ露骨でなく、婉曲になつて來た。かように封建制度は、半自由な農民の労働を土臺とする農業制度であつて、奴隸制度よりも一そう能率の高い經濟組織であつた。

【都市の發達と手工業】

この間に、一方には手工業がだんぐく發達した。そして農奴の生活に甘んぜぬ氣慨のある青年は、獨立の手工業者となつて、領主の權力がまつたく届かぬか、それとも領主の權力が比較的弱い地方に移住したので、いたる處に都市が發達した。手工業が新しい生産方法として、社會的に重要になつて來るにしたがつて、都市の手工業者はだんぐくと領主の支配を脱して獨立するようになり、或る場合には、領主は進んで彼等に多少の自由や特權を與へて、都市と手工業との進歩を促がした。

手工業者はおのゝ小規模の職場を持ち、簡単な道具と原料を持つ獨立の生産者であつて、彼等はこれ等の道具と原料——即ち生産手段——に自分の労働力を應用して、いろゝの手工品を生産する。そして生産したものは、當然自分の所有に歸する。かように手工業者は、一面には労働する人であると同時に、一面には生産手段の所有者——今日の資本家——である。そして自分の算盤勘定で事業を經營してゆく點では、今日の企業家の性質をも備へてゐた。そこで労働する

力と生産の手段——今日の資本——とは手工業の場合には、同一人に結合されてゐたのである。

その結果は、いはゆる『労働全收權』といふ思想が、實際の上に行はれてゐたことになる。即ち自分の生産手段に自分の労働力を應用し、それから出來た生産物は、全部自分が收得するのであるから、自己の労働の果實は、自己が收得するといふ私有財産主義の眞髓は、中世の手工業となつて、最も美しい花を開いてゐたのである。

手工業によつて、人間の労働の生産力は著るしく増加した。しかるにこの手工制度も、生産の技術がいま一段の進歩をして見ると、全く不都合な制度になつて來た。

【近代の機械工業】 蒸汽機關が發明され、大規模の機械組織を用ひて大量的の生産をやる日

になると、生産手段はとて一人々々で所有して、一人々々で應用するわけにはゆかぬ。従つて一人々々はその職場や生産要具や原料を所有する手工制度は、全く不都合なものであつて、機械制の大生産が行はれてくれば、勢ひこの手工制度が倒れねばならぬし、また手工制度とこれに伴ふいろくの制度が倒れぬ限りは、一そう生産力の高い大規模の機械組織や工場制度を、生産に應用するわけにはゆかぬ。そこで曾ては最も能率の高い生産の方法であつたからこそ行はれた手

工制度も、生産技術が一そう進んで來ると、却つてそれ以上に生産力を發達させる妨げとなつてくる。

そこでこの手工制度がだんぐ衰へて、これに代つたものが現在の機械工業制度であつて、この機械工業といふ生産方法の上に組み立てられてゐる現在の經濟制度をさして、吾々はこれを近代的資本主義、工業資本主義、または一口に資本主義の經濟制度と呼んでゐる。

【經濟組織の進化する法則】 かように原始時代の共產制度が崩壊して以來、いろくの經濟組織が興つたり倒れたりした。そして一度びは人間社會の必要に應じて生まれた生産制度も、のちには不必要な制度となり、一度びは有効であつた制度も、のちには有害な制度となり、一度びは社會を給養する上に、比較的適當だつた制度も、のちには社會を給養する力の無いものとなり、一度びは人間社會の進歩を助けた合理的な制度も、のちには却つて、その進歩を阻害する不合理な制度となる。今日まで人間の社會が經驗してきた如何なる經濟組織も、この點では皆な同じことであつた。どの經濟制度も、永久に有効な制度ではなく、どの經濟制度も、かつては有効でなかつたものはない。そこでどの經濟組織も、何時かは、この制度を打破せぬ限りは、生産力の進歩

したがつて人間社會の進歩が不可能となるか、即時にまつたく不可能とはならぬまでも、著るしく發展が阻害せられる時期がくる。そしてこの時期を指して、マルクスは社會的革命的時代の名づけてゐる。

「……社會の物質的生産力は、その發達の或る階段に達すると、この生産力がいまゝでその内部で働らいてきたところの在來の生産關係、ないしはその法律的の現はれにすぎないところの所有關係と、矛盾するようになる。この關係は、生産力の發展形態だつたものが、一轉してその足械となる。そこで社會革命の時期が開始する。經濟的基礎が變化するにつれ、巨大な上部構造の全體が、徐々に若くは急激に變革される……」。

【マルクスの説明】そこでこのマルクスの言葉を實例に當てはめて見ると、たとへば社會の物質的生産が手工業といふ程度に發達すると、生産手段は獨立の手工業者が所有し、そしてこの生産手段は、獨立の手工業者——即ち親方職人——と傭はれ職人、ないしは同業組合の規則で定められた一定の人數の年俤徒弟によつて、利用せられるといふような、一定の生産關係が定まつてくる。そしてこの生産關係が法律の形を取つたものが、即ち當時の財産關係、ないしは所有關

係である。そこで當時はこの新しい生産の條件、ないしは生産の關係は、それ以前の奴隸制度や農奴制度にくらべて、一そう發達した生産力の形態であつたが、社會の生産がさらに一そう進歩して、機械による生産といふ程度に達すると、この新しい生産力と舊來の生産關係とが衝突する。そして舊來の生産關係が取り除かれぬ限りは、新しい生産力は充分に伸びることが出来なくなる。この舊來の生産條件が生産の障害物となつた瞬間こそ、社會的變革の始まる時期であつて、舊來の生産の組織は新しい生産力の前に粉碎され、その結果として、一そう有效な、一そう能率の高い經濟制度が、これに代はることとなるのである。

【資本主義はどうか？】 しかれば現在の資本主義の經濟組織はどうであらうか。民衆が一枚の着更へに困つてゐる時に、絲と織物との生産を制限し、數百萬の人々が勞働を欲してゐる時に、たゞ資本家にとつて引合はぬといふ理由のために生産を中止しなければならぬことは、明らかにこの經濟組織が、生産力の『足械』となつた證據ではあるまいか。

今日ヨーロッパの資本主義各國は、いづれも經濟上の再興といふ問題に頭を悩ましてゐる。この問題の解決に成功すると否とは、ヨーロッパの資本主義の死活の問題である。そして經濟上の

再興とは、要するに生産力の増加といふことに外ならぬ。

ところがヨーロッパ各國では、幾百萬の人々は、労働を欲しても労働の機会が與へられないで怠惰を強制せられてゐる。して見ると今日ヨーロッパの資本主義には、この幾千萬人の生産力を利用する能力が無くなつてゐるのである。これは今日、吾々の生活してゐる社會の經濟組織が、果して社會全體を給養する能力のある制度であるかどうかを、冷靜に省察すべき時期に達してゐる證據ではあるまいか。

(三) 生産者と生産手段との分離

【資本制度の特徴】　そこで今や吾々は、今日現にこの社會の全員を給養してゐる仕組み、即ち現在の經濟組織が、良い經濟組織であるか悪い經濟組織であるか、果して社會全員を給養する能力のある經濟組織であるか否かと云ふことを、冷靜に考へなければならぬ場合になつて來た。

現在の經濟組織は、普通に資本主義の經濟組織、または資本制度と呼ばれる經濟の組織である

しからばこの資本制度の本質、その根本的の特徵は何處にあるかといふと、先づ第一には、生産者と生産手段とが、別々に分離したことである。

【機械工業とプロレタリアン】 今日こんにちの機械工業は、中世紀の手工工業の後継者であつて、手工工業の場合には小規模の道具でやつたことを、機械工業の場合には、澤山の道具から成り立つ機械でやつてゐるまでのことである。しかし道具が機械に變化した——即ち生産技術が變化した——結果として、經濟の組織はまつたく根柢から一變したのである。手工工業の場合には、前にも述べた通り、道具や職場や原料など——即ち一口に云へば生産手段——は、この生産手段の上に自分自身の労働力を應用する獨立の生産者が、めい／＼に所有してゐたものである。即ち生産手段とこれを利用する労働力とは、同じ一人の人に屬してゐた。ところが、今日の機械工業の時代になつて見ると、生産手段は莫大な金額に上るから、とうてい一人々々の生産者が、めいめい自分の生産手段を持つわけにはゆかぬ。

また機械工業の場合には、一組の生産手段は、何十人、何百人、何千人といふ多數の人々の労働力を同時に應用して、初めて利用することの出來得るものであるから、生産者がめい／＼自分

自身の生産手段を持つてゐるようでは、もとより機械工業の成り立つはずはない。そこで今日の機械工業は、労働力だけを持つてゐて、何等の生産手段をも所有せぬ人々——即ち無産者——があつてこそ、初めて成り立つことの出来得るものである。マルクスは『資本論』のうちにかう云つてゐる。

『……個人化され、そして多くの人々の手に散らばつてゐた生産手段が、社会的に聚積せられた生産手段に變化すること、多数の小財産が、少数の大財産に變化すること、そして人民の大衆から土地を剝奪し、生活の手段を剝奪し、労働の手段を剝奪すること——この恐るべくも痛ましい大衆の剝奪こそ、資本の歴史の序幕である』

そこで資本制度の第一の特徴は、生産手段を應用する生産者と、生産手段とが、まつたく分離してゐること、即ち労働力と生産手段とが別々の人の所有に歸してゐることである。一方には、生産手段を所有する人々があり、一方には労働力のほかには何物をも持たぬ事実上の生産者——即ち無産者——がある。もちろん今日といへども、自分の生産手段に自分の労働力を應用する獨立の生産者が無いわけではないが、これは過去の生産方法の遺物であつて、資本制度の特徴ではない

のである。私はさきに、資本主義の経済組織は、機械工業の上に組み立てられた組織であると言つた。その通りに違ひない。しかし機械工業による生産は、いかなる場合にも資本主義であるとか、ないしは機械工業による生産は、必然に資本主義になるとかいふわけではない。社会主義または共産主義の経済組織も、同じく機械工業にもとづく経済組織であるばかりでなく、大規模な機械工業がなくしては、社会主義や共産主義を考へることはできぬ。そこで機械工業による生産に、資本主義の性質を與へるものは、いま説明したような、労働力の持主と生産手段の所有者との分離といふことである。

【階級と階級との對立】生産者が生産手段から引き離された結果として、社会は利害の相反した二つの階級に分裂した。資本制度以前の世の中にも、もちろん階級の區別があつた。しかし例へば封建時代の士農工商とか、貴族と平民とかいふような身分の區別は、もはや今日いふところの社会的階級ではなくなつた。社会的階級なるものは、その人の門地とか血族とかの關係ではなくて、その人が社会の経済組織のうち如何なる位置を占めてゐるかを表はしたものである。言葉をかへて云へば、その人が、社会の経済組織といふ大きな機械のうちの齒車として、ど

んな種類の働らきをしてゐるかといふことで、その人の階級の所屬が定まるのである。も一つこれを具體的に言ひ換へれば、その人がどんな方法で、生活のための収入を得てゐるかといふことで定まるものである。

もとより収入を得る方法は、いろいろである。けれども生産者が生産手段から引き離されてゐる資本制度のもとでは、収入の方法は、どどの詰りまで押しつめて見れば、唯だ二つの方法に歸着する。即ち生産手段の所有から収入を得て居るか、それとも、唯一の所有物たる労働力を賣ることによつて、収入を得て居るかである。

この二つの代表的な生活の方法にしたがつて、社會は二つの代表的の階級に分かれてゐる。即ち生産手段の所有者たる資本家階級——資本主義社會における主たる財産は資本であるから、即ち有産階級（ブルジョアジー）——と、肉體上精神上の勤勞をする力のほかには財産を持たぬ無産階級（プロレタリア）とに分れてゐる。

【支配と被支配の關係】 多數の民衆は、生産の第一の要件たる労働力は持つてゐるが、この労働力を實際に應用すべき、生産手段は他人に持たれてゐる。

ところが今日のような大機械工業の世の中になつては、労働力——即ち労働する力——だけを持つてゐたのでは、一すぢの糸すらも生産することが出来ぬ。労働力を機械と原料との上に應用してこそ、すべての物が生産せられるのであつて、労働力はそのまゝ着ることも食ふことも出来ぬ。そこで労働力しか持たぬ者は、機械や原料——即ち生産手段——を持つてゐる者に、喉元を抑へられてゐるわけである。

であるから社會が經濟上の階級に分れるといふことは、やがて經濟上の支配と被支配の關係が出来上がることを意味して居る。即ち一方の階級が他の階級を、經濟上で支配する、そして一方の階級が他の階級に、經濟的に支配されるといふことを意味して居る。

ところが經濟上の關係は、やがて政治上、法律上、道德上、思想上の關係となつて現はれるものである。即ち經濟上で支配し支配されるといふ關係は、やがて政治上、法律上、道德上、思想上でも同じく支配し支配される關係を造るものである。そこで階級の區別はやがて政治上、法律上、道德上、思想上の支配と被支配との關係となるのである。

【資本制度の根本的矛盾】 かように生産者が生産手段から引き離された結果として、資本

制度の社會は、利害を異にし、目的を異にし、思想と道德と心理とを異にした一大階級に分裂した。もと／＼社會といへば、共通の目的をもつた一つの共同生活體を指すのである。ところが資本制度の社會は、いま述べたような資本主義の本質そのもの、結果として、今や一つの共同生活體たる實質を失ふて、事實の上では寧ろ二つの社會——相ひ敵對する二つの社會——となつてゐるのである。

かように生産者が、その生産の手段から引き離されたことが、即ち資本制度の出發點であつてしたがつてまた、最も根本的な特徴であり、また最も重要な本質である。そしてその他の資本制度のいろいろの性質と特徴——資本制度のうちに包まれてゐるいろいろの不合理と矛盾——とは、いづれもこの根本的な特徴と矛盾から出て來るものである。

(四) 勞働力の商品化

【自由を與へられた勞働者】

生産者がその生産手段から引き離された結果として、人間の

労働力は一種の商品となつた。労働は神聖なりといふ言葉があるが、資本制度の下では、この『神聖な』人間の労働力は、シャツや帽子と同じ一つの商品として、市場に賣買せられるものに過ぎぬ。そしてこの商品に對して支拂はれる代價を指して、賃銀と云ふのである。

「……一方には他人の労働力を買ひ、これによつて自分の所有する價値の總額を増加しようとする貨幣と生産手段と生産資料との所有者、他方には自分の労働力の賣手たる……自由労働者、彼等は二重の意味において自由労働者である。すなはち彼等は奴隸や農奴などの場合のように、生産手段の一部分を成すものでないといふ意味でも自由労働者であるし、また彼等は小農の場合のように生産手段を持つて居らぬといふ意味でも、自由労働者である。そこで彼等は、何等、自身自身の生産手段の累らひをも受けぬ、全くの自由人である。」

【資本制度は商品労働がなくては成り立たぬ】 マルクスは資本主義の生産が行はれる第一の條件を説明して、右の如く述べてゐる。

マルクスも若いころ書いたものうちには、資本制度のもとでは労働は商品であるといふようにも書いてあるが、これは不精確な云ひ方で、マルクスが後年書いたものうちには、明らかに

労働力が商品になつたと書いてある。もちろん細かな點では、人間の労働力は、この労働力によつて作られた商品とは性質の違ふところがあるが、しかし資本制度の世の中では労働力は商品と全く同一に取り扱はれてゐる。資本制度の下では、労働力は一種の商品である。

奴隷制度のように、奴隷の身柄が賣買せられる場合には、労働力は商品ではなかつた。資本制度の世の中になると、労働者は商品どころか立派な自由民であつて、法律の前には——少くとも法律の手前だけは——一労働者も大資本家も、一切平等といふ觸れ込みになつてゐる。しかし労働者は、その労働力を應用すべき生産手段を他人に握られてゐるので、勢ひ生活するためには、自分の労働力を生産手段の持主に賣らねばならぬ。そして生産手段の持主——資本家——は、原料や石炭を市場で買入れるのと同じように、商品としての労働力を、何時でも、また入用の分量だけ、最も安い市場で自由に買入れることができ、それでこそ、初めて収益を目的とする生産を営むことが出来るのであるから、商品としての労働力がなくては、資本制度は一日も存続することはできぬ。

【労働は商品に非ず?】ところが今日では、労働者は自分の労働力をシャツや帽子と同じ商

品として賣ることには、もはや満足しなくなつて來た。彼等は奴隸がその身柄を商品とされるときに満足しなくなつたように、更に一步を進めて、自己の勞働力が商品とされることに反對する。

『勞働は商品にあらず』といふ言葉は、現に勞働者の口からも聞かれる叫びであるが、これは今日の資本制度の社會において、勞働力が商品として取り扱はれて居らぬと云ふ意味ではなく、勞働力が商品とされてゐる現狀に對する、勞働者の抗議と要求との聲である。であるから、勞働者の抗議と要求としてののみ、この言葉は正しい言葉である。しかしブルジョアと支配階級とが『勞働は商品にあらず』といふならば、この言葉は勞働者を欺くための明らかな虚偽の言葉である。

世界各國の勞働運動は、勞働力が商品たることを廢止しようとする運動にほかならぬ。

かような勞働者の要求がますます有力となつて、勞働者がもはやその勞働力を、商品として市場に出すことを承知せぬ時期が來たならば、資本制度は一日も存続することはできぬ。そこで資本制度のうちには、勞働力を商品としておかねばならぬ必要と、商品勞働を廢止しようとする強烈な要求と、この矛盾した二つの勢力が闘つてゐるのである。

(五) 生産と消費との矛盾

【奴隷と労働者——賃銀奴隷制度】 労働力が商品となつたので、資本家は原料品を買入れるのと同じ意味で、労働力と名づける商品を買ひ入れる。この労働力の代價が、賃銀または給料である。

資本家が原料を市場で買ひ入れるのは、この原料に労働力を應用してさらに新しい商品を製造すれば、原料に支拂つたより以上の貨幣價値が得られるからである。資本家が労働力を市場で買ひ入れる動機も、全くこれと同じであつて、この労働力を原料に應用して品物を造れば、賃銀として支拂つたよりも、一そう多くの金が取れるからである。

そこで今日の資本制度と、これを反面から見た賃銀制度といふものは、人間の一日の労働には、その人の一日の生活を支へるよりも多くのものを生産する力がある——即ち剩餘生産の力がある——といふ事實が土臺となつてゐる。昔の奴隷の持主が奴隷を飼つておいたのは、奴隷には剩餘

生産の力があつたからである。今日の資本家が労働者を雇傭するのは、その賃銀以上のもを生産する力があるからである。この點では、今日の資本家が労働者に賃銀を支拂ふのは、往昔の奴隸の持主が奴隸に食物を與へたのと、全く同じ理由によるものである。そこで今日の賃銀制度を指して、賃銀奴隸制度といふのである。

奴隸制度も賃銀制度も、いづれもその目的は剩餘生産の搾取であつて、奴隸の持主は、奴隸そのものが商品であつたために奴隸から剩餘生産物を勝手に搾取することが出来たが、今日の資本家はそれとは反對に、労働者が『自由』であつて、その労働力が商品であるために、同じ目的を一そう巧妙に婉曲に『人道的』に成し遂けてゐる。資本制度が奴隸制度よりも『文明的』であるといはれる所以は、實にこゝにある。

【生産過多】　そこで労働者は、一日（假りに）二圓で労働力を資本家に賣り渡す。資本家はこの労働力を自分の所有する生産手段——原料と機械——の上に應用する（即ち消費する）。そしてその結果、原料の代價と機械の損減とを（これを假りに四圓と見る）差引いて、尙ほこの上に正味四圓の新しい價値、即ち剩餘價値の、附き加はつた品物を生産したとする。そこでこの品物

の價值は、二圓と四圓と四圓、合計十圓といふことになる。この場合には労働者は、自分の労働力の代價として受取つた一日分の賃銀では、自分が一日の間に生産した品物の、僅かに五分の一しか買ひ戻すことが出来ぬ。そしてその餘の五分の四は、資本家の手に残つてゐる。この品物は一たい誰れが買ふ。消費者の大多數は労働者である。ところがこの労働者は、毎日十圓づゝの品物を造つて、二圓づゝの賃銀を受取つてゐる。これはちやうど手桶に五杯づゝの水を汲み込んで一杯づゝ汲み出すのと同じであるから、幾ら大きなタンクでも、何時かは溢れ出すにきまつてゐる。そこで資本主義の經濟には、をり／＼品物が有り餘つて、市場といふタンクから溢れ出す時期が廻つて來る。經濟學者はこれを名づけて、生産過多の状態といふのである。

【經濟界の恐慌】

經濟上の恐慌は、たいてい生産過多の状態を呈するものであつて、昨年

(大正九年)あたりの市場の狀況は、ちやうどこの時期に達したものである。品物が有り餘つて買手が無い。そこで織物工場の閉鎖や紡績の操業短縮がぞく／＼行はれる。即ち品物が有り餘るから、ことさらに生産を中止したり生産額を制限してゐるのである。然らば國民は絲や織物に有り餘つてゐるかと思ふと、決してそうでない。有り餘つてゐるのは綿絲業者や織物業者の倉庫

だけのことであつて、國民の多數は、依然として生活必需品の缺乏に苦んでゐる。そこで生産過多とは云つてゐるが、その實は生産が多ほ過ぎるのでなくて、労働者の消費力——買ふ力が——少な過ぎるのである。

恐慌は十年ごとには起こるものだと云はれてゐた。しかし今日では、一方には信用機關が世界的に發達したり、一方には生産がますます投機的になつたので、恐慌は、かならずしも正確に十年ごとには起こらない。また恐慌の模様も大分變つてきた。しかし急激な破綻が、ざりくと續づく不景氣に變はるといふように、恐慌の症狀はいろいろに變化しても、病氣は同じである。顔に吹き出しても脚に吹き出しても、急性でも慢性でも、梅毒は梅毒である。今日の資本主義生産の組織では、恐慌といふ經濟組織の梅毒は、何かの形をとつて、かならず或る時期には現はれてくる。

【國と國との戦争はなぜ起るか】工業が進歩すればするほど、生産に必要な資本の割合は増加し、したがつて資本の總額に對する利潤の歩合は減つてくる。そこで資本家は自己保存のためには、ますます澤山の生産をし、ますます多くの剩餘生産を労働者から搾取する必要がある。

ところがますます多くを生産し、ますます多く労働者を搾取すると、それだけ、生産過多といふ破綻の時期が早くなる。かように資本制度のうちには、生産を無限に擴大してゆく必要と、生産を無限に擴大することを許さぬ事情との、二つの矛盾した力が働らいてゐる。資本制度の生産は、自分自身の作用によつて破壊され、打ち伏せられてゐるのである。

そこで生産過多といふ避けられぬ運命を切り抜けて、生産を無限に擴大して行かうとするところから、殖民地争奪の競争と、外國市場の争奪とが起こつてくる。そしてその結果は、いつでも國際戦争である。戦争は富の破壊であるから、勝つても敗けても、兎にも角にも、市場を塞いでゐるた品物を一掃する効果がある。この點では、戦争は恐慌の代用物となることが出来る。そこで恐慌が過ぎ去つたあとと同じように、戦争が過ぎ去ると、嵐のあとの快晴のように、再び事業が活氣づいてくる。かように恐慌と戦争とは、行き詰つた資本主義を救ふ唯一の安全瓣ではあるが、しかしまた、かような富の破壊が適度を越えると、今度は資本主義はこの手傷から恢復することが出来なくなる。ロシアは戦争の途中で、すでにこの時期に達したので、資本制度は滅亡した。ヨーロッパのその他の國々も、戦争がいま一年も繼續して居つたなら、恐らく同一の運命に陥入

つて居つたらう。そこで彼等は講和を急いだのである。

【帝國主義】

資本主義國と資本主義國との間の戦争は、資本家のために商品の販路を獲得し

ようとする、かうした市場の争奪から起こるばかりでなく、原料の産地を自分の勢力下におかうとする競争からも起こるものである。また金融資本が発達してくると、生産物の輸出ばかりでなく、有利な投資の場所をめがけて、資本そのものを輸出する競争が激烈になつてくる。先進資本主義國は後進國に資本を輸出し、これらの國々を、自國資本の殖民地として搾取する。そこで殖民地や半殖民地に對する資本主義國の争奪と支配の争ひは、國際戦争のます／＼重大な原因となつてくる。今日は各國の資本家階級とこれを代表する政府とが、この地球の表を自國の資本で支配しようとして、しのぎを削つてゐる時代であつて、これを資本の帝國主義といふ。帝國主義とその必然の結果であるところの帝國主義的戦争とは、資本主義そのもの、固有本來の作用にもとづいた避くべからざる歸結である。そして歐洲大戰は、その最初の世界的な現はれであつた。

恐慌と戦争とは、資本制度の内臓にかくれてゐる致命的の難病が、最も露骨に、かつ最も急激な形で現れた症状である。富が有り餘るために、國民の多數が失業者となつて衣食の道を失なふ

といふことは、資本制度以外の世の中では、とうてい想像だもすることのできぬ奇怪な現象である。

(六) 資本制度の浪費

【強制的の怠惰】 資本制度は、恐慌の安全瓣と戦争の息抜きとで、僅かに存在をつゞけてゐる。かように資本主義の生産は、一定の期間ごとに、莫大な富の破壊を行ふことによつて、僅かに繼續せられてゐるとしたならば、これは驚くべき浪費の制度であるといはなければならぬ。資本制度は前にも述べた通り、かつては能率ある有効な経済制度であつたが、今日では、社會全體にとつて、極めて不経済な制度となつたのである。

恐慌の起こる度びごとに、そして慢性的の恐慌ともいふべき不況期の襲來するごとに、多數の労働者は失業して、強制的の怠惰を強ひられる。彼等は、働らくべき意志がありながら、生産手段が他人の所有に歸してゐるばかりに、労働の機會が得られない。そこで莫大な労働力は、全く

空費せられてしまふのである。

【産業の豫備軍】 かような労働力の浪費は、恐慌の場合には最も著るしく現れるが、しかし平時でも、資本制度はかような労働力の浪費なしには、存続することができぬ。資本制度のもとにおいて、先づ一定の需要があつて、しかる後にこの需要に應じた生産が行はれるのではなくて、生産は多かれ少かれ投機の性質を帯びてゐる。そこで市場の變動につれて、生産は絶えず動搖し伸縮する。そして生産が一伸一縮する度びごとに、多數の労働者は工場に吸ひ込まれるかと思ふと、忽ちにして、失業者として巷に吐き出される。かように資本主義の生産が、資本家の必要に應じて自由に、圓滑に、膨脹したり収縮したりするためには、たえず多數の失業者が、産業の豫備軍として労働市場にあることが必要である。そしてこれは云ふまでもなく、社會全體にとつては、容易ならぬ労働力の空費を意味して居る。しかるに資本主義の生産は、この不經濟と浪費なしには、一日も存続することができぬ。

【經濟的の無政府状態】 資本制度の下においては、社會の全員を養ふために、これこれの品物がこれだけ必要であるから、これだけの生産手段と労働力とを振り向けてその品物を生産する

といふわけではなく、何等の計劃も統一もない謂ゆる經濟的の無政府状態であつて、これを支配してゐるものは、たゞ個々の資本家が最大の利益を収めようとする欲望である。これが謂ゆる自由競争であつて、その結果として資本主義の生産には、強制的の怠惰——失業——による勞働力の浪費以外にも、尙ほそれ以外の驚くべき浪費が行はれてゐるのである。

資本主義が發達するにつれ、企業はますます集中される。即ち一個人の小企業は、大會社による大企業にまで集中され、これ等の大企業は、トラストや合同などにより、さらに大きな企業にまで集中され、かうして一國の生産は、いよ／＼ますます、少數の大きな中心に集中され、統一され、したがつて、それだけ、盲目的な自由競争は制限され、資本主義の生産は、無政府状態の亂脈から救はれるかのようである。けれども、事實は決してそうでない。なるほど企業は、ますます少數の大きな中心に集中されるには違ひはないが、その結果は、數多くの小さな群雄が滅びたといふだけであつて、そのあとには、もつと多くの軍勢を引きつれ、したがつて一そう大きな破壊力をもつた大きな群雄が割據して、生死の争ひをつゞけてゐる。依然として資本の戰國時代であるのみならず、資本の混戰状態は、今日では一國內ばかりでなく、國際的の規模で行はれるよう

になつた。そこで企業の集中した結果は、資本主義の無政府状態がなくなつたのではなくて、この度合ひにおいても規模においても、一そう擴大し、一そう緊張したのである。

【無益な品物の生産】資本制度のもとでは、失業のために莫大な労働力が浪費されてゐることとはしばらく別として、現に働らいてゐる労働者のうちでも、實際、社會にとつて必要な生産に従事してゐる者は、寧ろ少數であつて、多くの労働力は、無益に浪費せられてゐる。その證據には、歐洲の大戦争中には、各國の政府は多數の労働者を従來の仕事から取り去つて、軍需品工場に使用したにも拘はらず、必要品の生産は、これがために少しも減じなかつたと云ふことである。これは平時に、澤山の労働力が無益なことに使はれてゐた證據である。

【必要な生産の制限】その外、資本家や金持の個人的必要や慾望を充たすために使はれてゐる人員は、驚くべき多數にのほつてゐるが、これ等の人々は、何かしら労働なり勤勞なりしてはゐるものゝ、社會全體にとつては、全く必要のない仕事をしてゐるものであるから、同じく労働力の浪費を意味するものである。

資本制度の下においては、必要のある物が生産せられるのではなくて、買手のある物が生産せ

られるのであるから、社會全體にとつてさほど必要でない奢侈品や、贅澤品や、ないしは積極的
 に有害な品物の生産のためにも、莫大な生産力が用ひられてゐる。すべてこれ等の生産力の浪費
 の結果は、必要品の生産をそれだけ制限することとなる。これ等の生産力は、必要缺くべからざ
 る品物の生産に振り向け得られるものであり、また當然振り向くべきものである。ところが資本
 制度のもとでは、これ等の必要品が缺乏してゐるにも拘らず、莫大な生産力は、無益な品物の生
 産や、無益な勤勞のために浪費せられてゐる。そしてそれだけ、社會全體にとつて必要缺くべか
 らざる品物の生産が妨げられ、制限せられてゐるのである。

【競争の浪費】

生産力の全然の浪費はしばらく別として、現に必要品の生産に用ひられてゐ
 る勞働力のみについて見ても、今日の生産には、驚くべき浪費と不經濟とが行はれてゐる。同じ
 品物を生産するにも、たくさんの競争會社があつて、これ等の會社はおの／＼別々の建物を持ち、
 別々の動力を持ち、別々の計算を持ち、原料の仕入れと製品の販賣のためにも、別々の機關を設
 けてゐる。また別々に専門家を使つて、お互ひに隠し合ひをして生産技術の研究をもちやつてゐる
 そこで或る會社で原料や勞働を節約する發見や發明がされても、他の會社では同じ發見や發明を

するために、同じ経費と労力とを費さねばならぬ。日本の紡績業などでも、互ひに女工の争奪をする結果として、全くの不熟練工たる女工を募集するためにすら、一人前七八十圓から百圓以上の募集費を使つてゐる。

これについて面白い實例がある。一八九五年に米國製釘工場（米國製釘工場）の合同が組織せられた時には、全國の製釘工場には、需要額の四倍の釘を生産するだけの製釘機械があつた。また米國にウキスキ（ウキスキ）一會社の合同ができた時には、八十の醸造所のうちで、僅かに十二だけで優に需要に應じ得るところが分つた。砂糖業もその通りで、四十の製糖工場（製糖工場）のうち十八工場が破産したので、残りのうちに十八工場が集まつてトラストを組織した。そしてその内十一工場を閉鎖し、七工場だけで充分に需要額の生産をすることが出来た。これと同じ事は、トラストや合同の行はれる場合には、常に經驗せられてゐる事柄である。

これは何事を語るであらうか。云ふまでもなく、資本制度のもとでは、生産に統一と計畫とがなく、たゞ利益を追ひ求める資本家の亂脈な競争に任せられてゐる結果として、工場なり、機械なりが——即ち生産手段が——充分に利用せられて居らぬことを物語つてゐるのである。

この一事によつて見ても、資本制度にはもはや生産手段と労働力——即ち社會の生産力——を充分に利用する能力の無いことが分るのである。

【商業の浪費】 かように浪費と不經濟とで出来上つた品物を、さらに交換し流通する段になると、資本制度の浪費と不經濟とは、一そう驚くべきものがある。

今日、商品の流通——即ち商業——に費されてゐる莫大な資本と労働力とは、大部分は無用の冗費であつて、社會主義の經濟制度の場合には、當然節約せらるべきものである。どの地方にも大小の都會があるが、たとへばこれ等の都會に軒をならべてゐる商店とその従業者との九分九厘までは、社會にとつて何等の必要もない仕事をしてゐるものである。市街の兩側に浪費の制度たる商店が軒をならべてゐるのを見て、何人も不思議とせぬほどに、資本制度のもとでは、浪費は日常普通のこととなつてゐる。

【廣告費と販賣費】 生産物を賣るために費されてゐる浪費のうちで、最も甚だしいものは廣告の費用である。米國では、一八九九年には、新聞雜誌の収入は一億七千五百八十萬弗であつたが、一九〇九年には三億三千七百六十萬弗となり、十年間に九割二分の増加をしたわけである。

そして一八九九年には、くわうこくれう 廣告料は全收入の五割四分四厘であつたが、一九〇九年には六割に増加したのである。また英國では、會て石鹼工場の合同が組織せられた時、『デイリー・メール』紙はその結果として一ヶ年二百萬圓の廣告料の収入が減るといふので、合同に反対した。その後の調査によると、合同の結果、新聞の廣告料は一ヶ年五百萬圓減つたといふことである。

新聞の廣告料は、廣告費のほんの一部分であつて、新聞雑誌の廣告以外にも、いたる所に天然の風致を損してゐる看板廣告や、俗悪な電氣仕掛けの廣告や、その他ありとあらゆる物と機會と方法とを、廣告に使つてゐる有様を見たならば、資本制度の販賣方法が、如何に浪費を意味してゐるかど分る。實際の生産費用よりも、廣告費の方が澤山掛つてゐる品物は、今日は決して珍らしくない。賣藥とか化粧品とか、その他主として廣告の力で販路を開いてゐる特殊な品物は、しばらく別としても、たとへば書籍のようなものにしても、その賣れ高は内容の如何にあるのではなくて、精密に廣告費に比例するといはれてゐる。そこで通例、著者に支拂ふ原稿料の少くとも二倍か三倍は、廣告費になつてゐる。或る有力な雑誌では、印刷費用と原稿料とを總計したもののよりも、遙かに多くの廣告費をかけてゐる。いま本屋の店頭で、五十錢の雑誌を買つて讀む人は、

その内の少くとも三十銭は、その朝の新聞で廣告を見た料金に支拂つてゐるのである。廣告以外にも多くの販賣員を出したり、定價表や説明書を造つたりする費用などを計算に入れたなら、資本制度の商業が、如何に高價なものであるかは直ぐ分かる。そしてこれ等の費用は、結局はみなこれを消費する需要者が支拂つてゐるのである。

【資本制度は不經濟】資本制度がそれ以前の經濟制度に代つたのは、社會の生産力を一そう有効に利用する制度であつたからである。しかるに今日では、資本制度はもはや社會の生産力を充分に利用することが出来ぬ。否な今日では、驚くべき浪費と不經濟の制度になつたのである。かように資本制度は、物質上の浪費の制度であるが、さらに資本制度に含まれてゐる人間の浪費、精神的の浪費を考へたなら、一そう驚くべきものがある。

(七) 人間浪費の制度

【よき社會の一條件】資本制度は物質的に不經濟なばかりでなく、精神上にも極めて不經濟

な制度である。即ち富の浪費であるばかりでなく、同時に、人間そのものゝ浪費を意味してゐる。社會の目的は個人にあるか、それとも個人の目的は社會にあるか、これは卵が先きか鶏が先きかをきめるほど、厄介な問題である。しかしどんな社會が善い社會であるかと問ふたなら、すべての人々に、各々その持つて生まれた才能を發展させる最大の機會を與へる社會が善い社會であるといふことには——少なくとも、これが善い社會の一つの條件であることには——何人も異存がない。ところが資本主義の社會は、個性の發展を最も多く無視してゐる社會であり、個性の獨立を、最も無殘に破壊してゐる制度である。

【全ての人を商人化する社會】今日の社會では、藝術の才能のある人も、眞に藝術に一身を捧げることはできぬ。學問の才能ある人も、眞に學問に没頭することを許されぬ。なぜならば今日の經濟組織の下においては、すべての人は、藝術家たる前に、科學者たる前に、否な父たり母たり、妻たり、同僚たる前に、かならず先づ商賣人とならねばならぬからである。今日の社會では、兎にも角にも、貨幣で計算のできる何物かを造らぬ者は、社會のうちに生存の機會を與へられぬからである。

文藝家や藝術家は、自分は何よりも尊い——彼等の謂ゆる人生そのものよりも尊い——『至上』な藝術のために身を捧げて、藝術品を創造してゐるのだと考へてゐる。しかし彼等は藝術品を造ると同時に、實は商品——シャツや猿股に均しい商品——を造つてゐる。彼等はたゞ、これを覺つて居らぬだけである。藝術家が、もし藝術上の價值だけもつたものを造つて、貨幣で計算される價值——即ち購買力のある人々の需要を充たす品物——を造らぬなら、彼等は一日も生活することはできぬ。工場の労働者は、はつきりと意識して商品を造つてゐる。藝術家はアトリエや書齋といふ工場で、自ら欺いて商品を造つてゐるだけの相異である。工場の労働者は、かような資本主義の法則に支配されて生きてゐることを卒直に自認する。故に彼等は、資本主義に反抗する。アトリエの商品生産者は、至上的な藝術に生きてゐるつもりである。それ故に、彼等は資本主義に反抗せぬ。けれども商品の生産者として、商品の取引人として行動してゐる範圍では、藝術家は藝術家たる前に、先づ商人となつてゐるのである。

大學の教授でも、郵便局の事務員でも、小學校の先生でも、商店の店員でも、彼等の勤勞が單に社會にとつて有益なといふだけでは、一日も生活することはできぬ。彼等は有益なといふこと

以外に、貨幣で計算のできる価値のある勤勞をしなければならぬ。

そこで資本主義の社會では、すべての人は貨幣で計算のできる価値を造るといふ、唯だ一本筋の狭い嶮しい道に押し合ひへし合ひしてゐるのである。そしてその後ろからは、餓死といふ恐ろしい荊の笞をもつて、絶えず追ひかけられてゐるのである。

【資本主義の社會は惡平等の社會】かように資本主義の社會は、すべての人に生存の機會を平等に與へない。そしてこの不平等の結果として、すべての人を商品生産者といふたゞ一つの生活の型に押しこめ、個性と天分の發達を妨けて、最も惡い意味で、すべての人を平等にしてゐるのである。

マルクスはかつてドイツの舊ブルジョアを罵りつて『彼等は、有らゆる立派な口上にも似ず、産業の木に實る黄金の林檎を拾ひ集め、眞理や正義や名譽を、羊毛や砂糖やジャガ芋酒と交易することを辭せぬ』と云つたことがある。資本主義の經濟制度は、すべてのものを、砂糖やジャガ芋酒と同じ商品とした。そして人間の勞働をも、人間の勤勞をも、人間の良心をも、人間の貞操をも、否な人間人格そのものさへも、一律平等に商品にしてしまつたのである。

資本主義が、せつかく人々の持つて生れた才能と個性との發達を妨げてゐるために、社會全體がどれだけの損失を蒙つてゐるかは、到底、計算することのできぬほど、莫大なものに相違ない。

【資本主義の社會は不適者生存の社會】

資本主義を辯護する人は、やゝもすると、今日

の社會は自由競争の社會であつて、自由競争の結果として適者が生存し、社會は初めて進歩してゐるものだといふ。なるほど今日の社會においても、直接金儲けの競争ばかりでなく、人々の智力や才能に關する精神的の方面でも（それすらも究極は金儲けを目的とし、金儲けの動機に刺戟されてゐるものが、百のうちの九十九であるが）競争が行はれてゐるには違ひない。しかし多くの人は兩脚を縛られたり、足に鎖をつけられて競走場に立つてゐる。それは自由な競争ではなくて、最も不自由な、最も不公平な、最も不合理有害な競争である。

そこで今日の社會では、かような不公平不合理な狀況に最もよく適應した者が、適者として生き残るのであつて、社會全體の進歩のために最も役に立つ者が、適者として生き残るわけではない。社會全體の進歩を計るといふ上から云つたなら、今日の社會においては、多くは適者が追ひ落されて、不適者が生き残つてゐるのである。多くの青年は、たゞ相當の財産のある家庭に生まれて

こなかつたといふ落度のために、その天分の才能を開発するための教育を受ける機会を奪はれて
ゐる。ところが金持の家庭に生まれたといふ偶然の出来事は、天分の才能があると否とに拘らず
その人に教育を受ける特権を與へるばかりでなく、一生涯に社會に優越的地位を占める特権を
も與へてゐるのである。

これは驚くべき人間の浪費であり、人間の不經濟であつて、その結果、社會全體の進歩と幸福
とは犠牲にせられてゐるのであるから、資本制度は如何にも高價にして、贅澤な制度であるとい
はねばならぬ。

(八) 社會的生產と個人的所有との矛盾

【個人的の生産と個人的の所有】かように資本主義の經濟制度には、いろ／＼の矛盾と不
合理とを含んでゐるが、さきにも述べた通り、これ等の矛盾と不合理とは、根本の矛盾——生産
者と生産手段との分離といふ矛盾——に源泉を發したものである。

この根本の矛盾は、一面には、今日の社會に見られる種々雑多な矛盾と不合理となつて現れてゐる。そしてまた一面には、それは資本主義の經濟組織そのものをして、資本主義自身の力ではとうてい自分自身を救ひ出すことのできぬような、致命的な矛盾に陥入らしめたのである。

前にも述べた通り、手工工業による獨立の生産者の場合には、一本立ちの職人が、自分の勞働力を自分の生産手段——原料と道具——の上に応用し、出來上つた生産物は、同じく自分の所有となる。即ち生産手段の所有も個人的であるし、この生産手段を利用する方法——即ち生産の方法も——個人的である。そしてこれから出來た生産物の所有も、個人的である。即ち終始一貫して個人的だつたのである。

【生産手段は社會化した】 ところが資本主義の機械工業になると、大規模の機械や工場はとうてい一人々々の勞働者が、めい／＼一つ宛つ個人的に所有することはできぬ。否、大資本家すらも、今日では、最早やかならずしも、生産手段を一人で持つては居らぬ。原料とても同じことである。そこで會社組織の如きものが現れて、一とそろひの生産手段を、少數の人が集合的團體的に所有することゝなつた。更に大きなものになると、幾つもの大會社が協同して、生産手

ぬ。そこで生産手段の利用といふことになる、どこまでも集合的、團體的、若しくは社會的となつたのである。

たとへば一つの蒸氣汽罐なり發電機なりで運轉せられてゐる紡績機械があるとする。この紡績機械を利用するには、何百人ないしは何千人といふ男女の労働者が、集合的團體的に協力しなければならぬ。一つの打綿機の下にも、數十人の労働者が集合的に働らいてゐる。一つの混綿機の下でも、数十人の労働者が集合的に働らいてゐる。一つの梳綿機にも、同じく数十人の労働者が働らいてゐる。そして紡機の下には、何百人何千人の労働者が集合的に働らいてゐる。たゞ一つの動力によつて、何百人何千人の労働者が集合的に働らいてゐるといふばかりでなく、混綿部、梳綿部から荷造部にいたるまで、部門々々の労働者の間には、經濟學者のいはゆる分業と協業とが行はれて居つて、その一つの部門の仕事が停まつても、絲の生産といふ全體の工程が停まるといふように、各部門々々の労働者の間には、切り離すことのできぬ密接な有機的關係がある。ところが一つの動力で動いてゐるかうした工場が幾つもある。紡績工場もあれば、織物工場もある。製鐵工場もあれば、機械工場もある。そしてこれ等のいろ／＼の機械組織のもとに働ら

いてゐる一團の労働者^{らうどうしゃ}と他の一團の労働者^{らうどうしゃ}との仕事の間^{あひだ}にも、多いか少ないか、かならず有機的^{いうまてき}の關係^{くわんけい}がある。紡績工^{ほうせんこう}と鐵工^{てつこう}とは、何^{なん}の關係^{くわんけい}もないようではあるが、社會^{しゃくわい}の生産^{せいさん}といふ廣い立場^{ひろたつば}から見ると、一工場内^{こうちやうない}の分業^{ぶんげふ}と協業^{けいげふ}と同じように、これもまた、もつと廣い範圍^{はんゐん}での、分業^{ぶんげふ}と協業^{けいげふ}とにほかならぬ。

【生産方法と財産制度との矛盾】かように資本主義^{しほんしゆぎ}の經濟制度^{けいざいせいど}では、財産^{ざいさん}の私有^{しいう}といふことが土臺^{どたい}となつてゐるにも拘^かはらず、生産手段^{せいさんしゆだん}の所有^{しやうりゆう}といふ點^{てん}では、もはや純粹^{じゆんずる}な個人^{こじん}的^{てき}の所有^{しやうりゆう}といふことが毀^こわれかゝつて居る。そしてこの生産手段^{せいさんしゆだん}を利用^{りゆう}する方法^{ほうほう}——即ち生産^{せいさん}の方法^{ほうほう}——になると、個人^{こじん}的^{てき}な性質^{せいしつ}はまつたく無^なくなつて、集^{しふ}合^{がふ}的^{てき}社會^{しゃくわい}的^{てき}になつてきた。即ち多數^{すなは}の労働者^{らうどうしゃ}が生^{せい}産^{さん}手段^{しゆだん}を集^{しふ}合^{がふ}的^{てき}社會^{しゃくわい}的^{てき}に應^{おう}用^{よう}して、初^{はじ}めて生^{せい}産^{さん}が行^{おこな}はれることとなつたのである。これを云^いひかへれば、資本主義^{しほんしゆぎ}の生産^{せいさん}の中味^{なかみ}は、私有^{しいう}主義^{しゆぎ}といふその外側^{そとがは}の殻^{から}からはみ出^だしてきたのである。それでは集^{しふ}合^{がふ}的^{てき}社會^{しゃくわい}的^{てき}に生^{せい}産^{さん}せられた品物^{しなもち}はどうなるかと云^いふと、これは徹頭徹尾^{てつとうてつび}、個人^{こじん}的^{てき}に所有^{しやうりゆう}せられてゐる。社會^{しゃくわい}的^{てき}に生^{せい}産^{さん}せられたものが、個人^{こじん}的^{てき}に所有^{しやうりゆう}される。生産^{せいさん}は社會主義^{しゃくわいしゆぎ}（もちろん或^ある程度^{ていど}まで）で、所有^{しやうりゆう}は個人主義^{こじんしゆぎ}である。もう一つ云^いひかへれば、造^{つく}る間^{あひだ}だけは社會^{しゃくわい}的^{てき}で、

持つ段になると、個人的である。即ち資本主義の經濟制度においては、生産方法とそれから所有方法（即ち所有關係、財産制度）とが、互ひに矛盾し衝突してゐるのである。

（九）生産力と財産制度との衝突

〔失業問題は何を意味するか？〕生産の方法と所有の方法（即ち財産關係、または財産制度）とが矛盾衝突するによつてきた結果は、社會の生産力を、このうへ發展せしめることが、不可能となつたことである。

生産過多や、恐慌や、またはその他の事柄で、資本主義の生産がいちじろしく制限せられてゐることは、すでに説明した通りであつて、今日の世の中に、品物があり餘るために不景氣が起つたり、品物があり餘るために、多くの人々が飢えるといふような不思議な現象が起こるのは、畢竟、生産の方法と所有の方法とが、矛盾衝突してゐるからである。

たとへば今、英國に四百萬人の失業者があつて、飢餓に迫つてゐるとする。これを救ふために

は、この四百萬人の勞働力を働らかせて、彼等の生活になくてならぬ品物を、どしどし生産するほかに途はない。これほど見易い道理はない。即ち英國の社會は、生産の増加を必要としてゐるのである。ところが實際には、そうする譯にゆかぬ。資本家は、生産しても儲からぬ。したがつて生産は増加せぬ。これは云ひかへて見れば、生産力はあるが、生産した品物は、それを必要とする人々の手には這入らないで、他の人々の所有に歸するといふ所有關係。すなはち財産制度があるために、見すくこの生産力を利用することが出来ないのである。つまり生産力は伸びようとしても、財産制度といふ外側の殻に包まれてゐるために、少しも伸びることが出来なくなつたといふ有様である。

【魔物と魔法つかひ】そこで資本主義の經濟制度では、一方にはいよ／＼ますます生産力を増加する必要がある。ところが生産力を増加するためには、いろ／＼の大規模な機械が用ひられるようになり、生産の方法は、いよ／＼ますます社會的になつてくる。そしてそれが或る程度に達すると、このうへ生産力が發展しようとする、財産制度といふ外側の殻にぶつかることになる。

資本主義はマルクスの云つたように、『僅か百年ばかりの階級的支配の中に、過去一切の諸時代を合したよりも、一そう多く、一そう巨大な生産力を作り出した』。ところが今日は、資本主義はもはやこの巨大な生産力を、統御し利用することが出来なくなつた。それは丁度、マルクスの云つたように、魔法使ひが呪文を唱へて地の底から様々の魔物を呼び出しておきながら、却つてそれを制御する力を失つたのと同じである。

【生産力の障害】 資本主義の土臺になつてゐる財産制度の殻の中では、もはや社會の生産力の芽生えは、この上の成長と發達とをすることが出来なくなつてきた。芽生えが枯れるか、殻がはぢけるか、どちらかでなければ、解決がつかぬことになつた。マルクスはかう書いてゐる。

『社會の手にある生産力は、もはやブルジョアの財産に必要な條件を促進せぬ。否な、却つて生産力を束縛してゐるこれ等の條件にとつて、生産力は餘りに有力となる。そこで生産力がこの束縛を突破する度びごとに、ブルジョアの全社會を無秩序に陥し入れ、ブルジョア財産の存在を危うくする——』

【資本制度の功罪】 資本主義の經濟制度は、それ以前の如何なる經濟制度よりも、能率の高

い生産制度であつて、資本制度のもとにおいて、初めて人間の生産力は未曾有の發達をした。そしてそれ故に、資本制度はよく封建制度や手工制度に代つて、社會の生産組織になつた。ところが今日では、資本制度の外殻の中では、もはや新しい生産力の若芽が、これ以上に伸びられなくなつた。即ち新しい生命と舊るい制度（過去の生産力とこれにもとづく生産の關係とを結晶したもの）とが、衝突してゐるのである。

(十) 私有財産主義の動搖

〔私有財産制度は比較的新しい現象である〕　そこでこの生産力の新しい若芽の成長を束縛してゐる殻の性質をしらべて見る必要がある。

私有財産といふ觀念は、動物にすらもある深い根強い本能だといふ學者もある。そして多くの人は、私有財産の權利は、人間の先天的の權利であり、私有財産の制度は、永久の昔から變らぬ制度であると考へてゐる。ところが事實は反對に、私有財産制度といふものが人間の社會に現

はれたのは、比較的新しいことであつて、人類は過去幾十萬年、ないしは幾百萬年の間——即ち人類が地球の上に現れてから今日にいたるまでの大部分の年月の間——私有財産なるものを知らずに過して來たのである。

【私有財産觀念の基礎】それでは、私有財産の起原はどこにあるかといふと、まづ毎日着てゐる着物だとか、日々使つてゐる狩獵用の武器などが、先づ第一に、これが自分のものだといふことになつた。即ちこれ等の品物は、日常自分の肌身につけてゐるもので、ほとんど自分自身の體の一部分と見做されてゐた。そこでこの時代には、誰かど死ぬると、その人の生前の持物も一緒に葬るなり、または焼き棄てるなりしたものである。

この觀念がもう一つ變ると、今度は、自分の勞働の結果として生じたものは、その人が自由に處分すべきものである、即ちその人のものだといふことになる。私有財産の根柢となり、そして私有財産を正當とした理由はどこにあるかと云へば、自分の勞働によつて生産せられたものは、その人に屬するといふ根本觀念である。

なるほどこの觀念は、或る程度までは、慥に正しいものである。兎にも角にも、或る品物を、

誰れかのものときめねばならぬ場合には、自分の労働によつてその品物を造つた人のものときめるのは、或る程度まで正しい考へである。たとへば、さきにしばく説明した獨立の手工業者の場合には、自分の生産手段に自分の労働力を應用して、品物を生産する。そしてその生産物は、明らかに自分のものである。これは如何にも義理明白であつて、ほとんど疑ひを挿む餘地がない。若し自分の生産手段に自分の労働力を應用して出來上つた品物を、他人が持つてゆくことになれば、それこそ變てこなものである。

【労働全收權と私有財産主義】これはやがて自分の労働の成果は、全部自分のものにするといふ、労働全收權といふ思想の土臺となつてゐる考へである。或人は、労働全收權といふ思想をもつて、社會主義的な考へであるかの如く思ふてゐるが、それは社會主義的な考へではなくて、實は私有財産主義の極致とも、私有財産主義の花ともいふべき思想である。そして生産手段の所有も、この生産手段を利用する方法も、徹頭徹尾、個人的である手工業が、社會の主たる生産方法であつた時代には、その生産物を私有するといふ私有財産主義は、丁度かような經濟生活に當てはまつた正義の觀念を代表する、立派な制度だつたのである。

ところが今日ではどうだらう。今日は生産手段の性質が社会的になつてきた。そしてこの生産手段を利用して品物を生産する方法も、集合的社会的になつてきた。獨立の手工業者の場合には自分の仕事場で出来上つた品物は、自分の労働の結果であることが、一目瞭然と分つてゐた。それには少しの疑ひをさし挿む餘地もなく、何人もまた、それに異論をさし挿みもしなかつた。しかるに今日の機械工業の生産品はどうだらう。自分の働らいてゐる工場の生産品であるといふことは、決して自分自身の労働の結果であるといふ證據にはならぬ。

【労働全收權の原則に基づく分配は不可能になつた】 はやい話が、一尺の織物を取つてこれは何人の労働の結果であるかと尋ねたなら、或る輕卒な人は、それは機織工女の労働の産物であると答へるかも知れぬ。これは慥に事實である。しかし僅かに事實の半分である。

それは如何にも、機織工女の労働の結果には相違ない。けれどもいま一步踏みこんで考へて見ると、そのうちには赤道直下の太陽の下で、綿畑に働らく印度の労働者の労働が含まれてゐる。この綿を日本に持つて來るためには、船渠人夫と船員との労働が含まれてゐる。この綿を紡ぐためには、幾千萬の憐むべさ紡績工女——わづか十四か十五の歳に、誘拐同様にして買ひ出され、

一年か二年の間に、一生涯の健康を消耗し盡されて、巷に放り出されるこの悲惨な人間の犠牲が含まれてゐる。

さらにその糸を紡いだ紡績機械は、恐らくは英國のバアミンガムあたりの大工場で、鐵工のハムマによつて造られたものである。そのほかにも染色工の労働が含まれてゐる。陸上の運輸労働者の労働が含まれてゐる。頭腦労働者の労働も含まれてゐる。さらにその外にも、地底幾百尺の眞暗闇に鶴嘴を振るふ炭坑夫の労働も含まれてゐる――。

そこでこの一と片の布ぎれを指して、これは正しく、自分の労働の産物であると断言し得るものがあるであらうか。若しこれ等のいろくさまぐな種類と部門の労働者のすべてを集めて、諸君はおのく、この一尺の布ぎれのうちから、當然自分の所有に屬すると信ずる部分を取つてゆくと云つたなら、どうだらう。恐らく何人も、その糸の一筋すらも、これは自分の労働のみの産物であるから、當然、自分のものだと言張し得るものは無いだらう。人はおのく自分の労働の結果を所有するといふことが、私有財産主義の基礎であり理由であつた。しかるにこの布ぎれの場合には、この根本の基礎が、まつたく無くなつてゐるからである。

「私有財産主義の觀念はぐらつて來た」

要するにこの僅かの布ぎれも、これ等のすべ

ての勞働者の集會的の産物であつて、集的に所有する外ないものである。しかるに若しそのうちの力の強い一人が、これは自分の私有財産であると云つて、この布ぎれを奪つて行つたなら、これは明らかにこの場合の正義の觀念に反してゐる。即ちこの品物は、集会的社會的に生産せられたといふ生産状態に適合して生れた正義の觀念に反してゐる。直接その品物の生産に携さはつた勞働者ですらその通りであつて見れば、萬一、その生産に直接に携さはらず、または全然携さはらぬ人——たとへば資本家——がやつて來て、その品物を自分の私有物として持つて行つたなら、これは疑ひを挿む餘地のないほどに明々白々な、正義の蹂躪であつたらう。

これは平凡な當り前の事柄のようであつて、實は極めて重大な問題である。なぜならば、私有財産主義の土臺がぐらつて來たことを意味してゐるからである。

そこで今度は、かような新しい生産方法に基づいた新しい正義の觀念に當てはまつた、新しい財産制度を要求する思想が現れてくることになる。

前にも云つた通り、私有財産主義と名づける財産制度は、生産が個人主義的であつた時代には

この事實をまさしく反映する正義の觀念を代表した制度であつた。即ち私有財産主義は、宙ぶらりの觀念ではなくて、その下には個人主義的生産といふ、しつかりした活きた事實——經濟上の事實の——基礎があつた。それ故にこそ、私有財産制度は發達し、確立したのであつた。この私有財産制度といふ外殼のうちで、人間の生産力は大に増進した。そして生産力が増進するにしたがつて、生産の方法はいよ／＼ますます／＼集合的、社會的になつてきた。

しかるに生産が社會的になつてきた結果として、私有財産主義といふ制度の足の下からは、何時の間にか活きたる事實——經濟上の事實——といふ基礎が消えてしまつたのである。そして私有財産主義といふ觀念は、まつたく經濟上の基礎のない、宙ぶらりの觀念となつてしまつたのである。そこで多くの人々は、私有財産主義といふ制度にも觀念にも、疑ひをさし挿むようになつてきた。

【國家と私有財産主義】そのみではなく、近頃は國家なり政府なりが、社會全體の利益のため、ないしは一部の資本家に對して資本家階級全體の利益を擁護する必要のためには、いろいろの形で、實際、私有財産主義に食ひ込んだり、私有財産主義を制限したりしてゐるが、今日では何

人もこれを怪しむ者もなければ、大して異論をさし挿む者もない。たとへば米の買ひ占めを罷するとか、商人の小賣相場に干渉するといふようなことも、明らかに、私有財産主義に制限を加へたものに外ならぬ。そこでかういふ方面からも、私有財産主義の神聖は、大いに疑がはれだしたといふことが分る。

【新しい正義の觀念】かくて資本主義の經濟制度のうちには、この私有財産主義といふ外殼と、この外殼のうちで成長した新しい生産力とが、互ひに矛盾衝突してゐるのである。そしてその結果として、舊るい經濟上の事實に基づいた正義の觀念、この事實と觀念とに基づいた所有の關係即ち財産制度と、新しい經濟上の事實、この事實を反映した正義の觀念とが、互ひに對立することゝなつた。今日世界各国の勞働運動と無産階級運動の底に流れてゐる力強よい要求は、要するに新しい經濟關係から生まれた新しい正義の觀念に適合するような、新しい所有關係を要求する聲であつて、この要求の背後には、かような力強よい事實が潜んでゐるのである。それは單純に頭の中で拵らへあけた空想ではなくて、この思想の上の變化には、事實の上の變化が先き立つてゐるのである。

(十一) 社會生活の危険と不安

【資本制度の下における生産の動機】 前にも述べた通り、最もよい經濟組織とは、社會の全員を最も有効に、また最も經濟的に養つてゆく制度である。ところが資本制度の下において、生産の目的は一個人の利得であつて、その偶然の結果として、社會の全員が給養せられてゐるに過ぎぬ。さきにも引用した福田徳三博士の名著のうちにも、かう書いてある。

『今日の生活に於ては、企業を離れて生産を考へることは殆ど不可能であります……。企業の生産に於ける意義は、土地、資本、労働とは著るしく違ひます。單に一の要素とか要件とか、云ふべきものではありません。抑々生産の起る根本の動力は企業でありまして、他の要素は企業あつて始めて意味を生ずるものであります。』

【民衆の生活はその偶然の結果】 資本制度の下における企業とは、利潤の收得を目的として、生産手段と労働力とを適當に組み合わせせること、即ち生産の行程を組織し編制することには

かならぬ。そこで資本主義の經濟制度では、生産を行ふ動機も目的も利潤であつて、社會の全員をより善く養ふといふことではないのである。言葉をかへて云へば、人民の多數が飢えてゐてもこれに食物を供給しなければならぬと云ふだけのことでは、生産は行はれぬ。また多くの人民が凍えて居つても、これに着物を供給するといふことは、今日の生産の目的とはならぬ。さらにまた、社會の進歩と幸福とのために、大きな貢獻をする才能を持つて生まれた青年が、たゞ貧乏な家庭に生まれたといふ偶然の出來事のために、その才能を開發せしめる教育の機會を與へられな

いで、無残に萎れてしまつてゐても、この青年を養ふといふことは、決して今日の生産の目的ではないのである。

【資本主義的生産の目的にかなつた行動】　そこで國民の多數は飢えて居つても、「引合は

ぬ』以上は、生産は行はれぬ。否な、せつかく外國から輸入してきた小麥をも、海中に棄てねばならぬように、せつかく運轉してゐる工場をも閉鎖したり、操業をも短縮する必要がある。これは今日の生産の行はれる動機と目的から見れば、まさに、その必要があるのである。

或る人はかような行動を見て、暴利をむさほるものだとか、奸商だとかいつて騒いでゐる。し

かし今日の社會では、生産の目的は個人の營利である。個人の營利企業といふ生産の目的から見れば、かような行動は、まことによくその目的に適つた妥當な行動であると云はなければならぬ。そこで今日の經濟制度そのものを是認しておきながら、暴利だとか奸商だとかいつて騒ぐのは、そも／＼矛盾の甚だしいものである。

【吾々はどんな事に覺醒してよいか】 かように今日の世の中では、生産の目的は社會の全員を養ふことではなくて、一個人の營利である。そして社會の全員が、ともかくも生きて暮らしてゐるのは、その偶然の結果にほかならぬ。社會全體の生存が、利潤收得者の氣紛ぐれに懸つてゐるとしたならば、これは如何にも危険なことであつて、高い崖の上から、一本の麻繩で、谷底に吊り下げられてゐるよりも、はるかに危険である。一二年前から『自覺』とか『覺醒』とかといふ言葉が流行語となつた。青年は自覺せよといふ。労働者は自覺せよといふ。一たい何を自覺するのであらうか。よしすべての事に目醒めても、この危険に目覺めて居らぬ人々の自覺は、夢心地のうちに見てゐる幻覺にほかならぬ。

(十二) 生活の改造

【思想の動搖は何を意味するか?】この危険を明らかに自覚したものは、少ないかも知らぬ。しかしこの危険と、それからくる脅威とを、無意識的に、ないしは半意識的に感じて居らぬ人はほとんど一人も無い。今日の世の中は、この無意識ないしは半意識の働らきから起るいろ／＼の事實で満ちてゐる。そして現代の労働者と無産階級の解放運動は、この危険に對する明白な自覺から起こつたものであつて、一般の思想の動搖と社會的不安とは、この危険に對する無意識的、ないし半意識的の反應にはかならぬ。

〔より善き生活への憧憬〕　そこでかような經濟生活の上の不安定は、多くの人々の頭にはたゞ漠然とした、より良き生活への憧憬となつて映つてゐる。軀のどこかに、たしかに調子の狂つた箇所がある。しかし痛みの箇所が、いよ／＼どこであるかは分らない。その原因が何であるかは、尙さら分らない。けれども兎も角も、もつと健康な幸福な状態がありそうに思はれる。そし

てこれを求める漠然ながらも、止みがたい要求がある。これが多數の人々の心理状態である。彼等は進むべき方向と目標とを、はつきりと意識して居らぬ。しかし新しい生活を求める強い要求は、現代のいちじるしい特徴であるといつてよい。

【生活改造の二つの道】しかしながら人間の生活を改造する方法は、究極は二つしかない。

即ちその一つは、自分自身を改造することであつて、いま一つは、自分自身の生活する条件を改造することである。言葉をかへて云へば、個體としての、一個人としての人間を變へるか、それとも、この一個人が集まつてする共同生活の仕組みを變へるかといふことである。

この二つの道のいづれが正しいかといふことは、現代生活の悩みが、何處に原因してゐるかといふことで決定する。もし今日の社會生活の不満と缺點とが、人間に目が三つないとか、手が八本ないとかといふような、生理的原因に基づいてゐるならば、吾々の生活を改造するためには、勢ひ個體としての人間を變へてゆくよりほかに仕方がない。けれども若しそれが、生理的原因ではなくて、社會的原因に基づいてゐるとしたならば、社會生活の改造をはなれた個人の改造といふことは、畢竟、無意義である。

「個人の改造か社會の改造か？」 自己の改造、自己の革命といふことは、二千年も、もつと前から、云ひつゞけられ、叫びつゞけられてきた。しかし今日にいたるまで、個體としての人間、生物としての人間には、大なる變化も、革命も起こつた跡方がない。これに反して個體としての人間が集まつてする共同生活の條件、すなはち社會の組織と仕組との上には、幾度びか大なる變革があつた。そしてこの變革によつて、幾度びか人間の生活は、根本から革命されたのである。

(十三) 自己改造の努力

【現状擁護の人生觀】 吾々の生活を改造する道は、個人を改造するにあるとしたならば、吾は事實上、生活を改造する望みを擲うたねばならぬ。もし吾々に目が三つないために、耳が四つないために、ないしは吾々が第六の感覺器や第七の感覺器を持つて生まれて居らぬために、この地上の生活が、今日の如く悲惨と不合理とに満たされてゐるものだとしたならば、吾々は目

をつぶつてこの運命に忍従するほかはない。今日の社會生活の悲慘と不合理とは、生物としての人間が不完全なためである——たとへば吾々に盲腸があるために、たびく腹が痛むのと同じように、吾々が一人々々の人間として不完全なためである——としたならば、これはもちろん、資本制度の罪でもなければ、資本家階級の罪でもない。そこで現在の制度と秩序との擁護を利益とする階級、またはこの階級の心理に感染してゐる人々、ないしはこの階級の傭兵となつて、意識的にその利益を擁護してゐる番犬の役目をしてゐる人々は、現在の生活の悲慘と不合理とを、社會的原因からくる社會的の現象とは見ないで、なるべく日蝕や月蝕と同じ自然現象にしてしまはうとするのである。

【哲學と文藝とは現實回避の手段】資本制度の社會における悲慘と不合理とを、盲腸や、蟲齒や、ないしは地震や大風と同じものと見て、目をつぶつて運命に忍従する人々よりも、いくらか氣概と勇氣のある人々——ないしは、運命に忍従するだけの決斷と勇氣のない人々——は、ともかくも、自分自身を改造しようとして努力する。彼等はこの資本主義の社會組織の眞中に、たゞ自分獨りの住む清らかな世界——ないしは蝸牛の殻を——建てようとして努力する。

しかしながら、黄金の神が萬能の神であるように、資本主義の組織は、遍在の組織である。神の知らざる處なきように、現在の社會には、資本主義のいまさざる處はない。資本主義は離ればなれの出來事ではなくて、すべてのものを包む一つの組織網である。現在の社會生活の最も小さいな出來事の一つといへども、すべてこの網の目から逃れることはできぬ。或人は哲學に逃れようとする。或人は文藝に逃がれようとする。また或人は『新しき村』に逃がれようとする。そして現に或人は、巧みに逃れ得たかのように信じてゐる。そしてその哲學も、その文藝も、その『新しき村』も、實はこの大きな資本主義網の一と目であることを覺らない。

【哲學的思索は資本主義に順應する努力】そこで内觀的哲學的の思索によつて問題を解決しようとしたり、問題が解決されるかのように思ふのは、問題の解決ではなくて、實は問題の回避である。彼等は自分の頭のなかで哲學的に片附けば、それで問題そのものが片附いたと思ふてる。彼等は實際生活の問題を解決しようとして出發したことは忘れてしまつて、たゞ頭の中の安價な解決で満足する。彼等はなるほど『哲學』を解決したかも知らぬが、少しも『生活』を解決せぬ。そこで現在の社會生活をこのまゝにしておいて、たゞ冬至南瓜ほどの自分の頭の中

で、問題の解決を求めめるのは、畢竟するに、現在の社會生活を肯定し是認する理屈と口實とを
發見しようとする努力に歸着するものである。

かような解決やかような努力は、まぶしいものに對して目を閉ぢたと云ふだけのことである。
瞼の外には依然として、まぶしい光が照り輝やいてゐる。それはまぶしい物をなくしたのではな
くて、我慢の仕方を工夫しただけである。それは資本主義の生活を改造したのではない。資本主
義の生活から逃がれ出たのでもない。たゞ自分の生活を、資本主義に順應させただけである。

社會生活とは人と人との關係であつて、決して吾々の頭の中に仕舞つてあるものではない。
吾々は考へねばならぬ。しかし目をつぶつて考へないで、大きく目を明けて考へねばならぬ。思
索や、瞑想や、哲學や、宗教によつて問題を解決しようとして、たゞ徒らに、干からびた小さな
南瓜かぼちやのような自分の頭の中をつゝき廻してゐる人々は、資本主義の經濟組織といふまぶしい事實
に目を開く勇氣のない人であつて、その結果は、いつでも問題の解決ではなくて、回避である。

【理想生活のまゝごと】これよりも少し正直な人々、ないしはもう少し空想的な人々は、
少數の仲間を集めて、ともかくも理想的な共同生活をして見ようとする。五六十年前に、米國

あたりで一時流行した『理想村』や『新しき村』の試み——理想生活のまゝごと——は即ちそれである。これ等の人々は、問題の解決を頭の中でのみ求めないで、他人との共同の生活の上に求めようとする。この點においては、たしかに一步を進めたものである。即ちこれ等の人々は、自分一人の哲學的理解や、腹の蟲のおきどころによつて問題が解決するのではなくて、ともかくも他人との共同生活——即ち社會生活——の上の關係と形態——即ち社會組織——を改めることによつてのみ、初めて問題は解決されるのだといふことを、暗に承認してゐるのである。

【片目を明けて見た社會觀】　しかしこの人々もまた、わづかに片眼を明けて見たこれだけの事實を、もつと凝視して、はつきりと見極はめようとはせぬ。否な彼等は、はつきりと見ることの危険を無意識に感じてゐる。そこで彼等は一面には、新しい生活の要件は、共同生活の上の關係——社會組織——の變更にあることを半無意識的に承認しておきながら、實際にやることは、現在の社會組織には少しも手を觸れないで、唯だその中に、理想的の一小區劃を造らうとするだけである。それが如何に堅固な外廓を回らした城塞であらうとも、同じく資本主義王國の版圖の上にあるものであつて、城廓の外と同じほど、資本主義の法則に支配されてゐるものだ。

いふことに、彼等は氣づかない。そこでかような努力は、かような努力の無益を知らしめることの外には、少しの社會的價值もない。それは一と晩、ウキスキーに酔つてガマ口の現實を超越し、資本主義以外の天地を逍遙してゐるような氣持になつたのと同じほど無意義であり、そしてそれ以上有害である。

(十四) 社會の改造

【經濟組織の改造は不可能か?】 吾々の社會生活を改造するいま一つの方法は、自分自身を改造する代りに、自分自身の生活する條件を改造することである。すなはち社會生活の組織と仕組みを變へることである。

しかるに吾々の社會組織の基礎根本となつてゐるものは、經濟の組織である。そこで吾々の社會生活、すなはち生活の條件を改造するといふことは、つまりは社會の經濟組織を改造するといふことになる。

しかしながら経済組織の改造といふことは、空想家の空想であつて、とうてい不可能である！なるほど資本主義の経済組織には、いろ／＼の不合理と缺點がある。しかし吾々の兩親も、この制度のうちに生まれて、この制度の裡に死んだではないか！吾々の祖父も、吾々の曾祖父も、同じくこの制度のうちに生まれて、この制度のうちに死んだのではないか！とかう云ふ人がある。云ふばかりでなく、ほんとにそう信じてゐる人もある。

【絲車と紡績機械】

私はある時田舎に歸つて、物置のガラクタのなかに、眞黒になつた絲車の轉がつてゐるのを見た。今から二四十年前、私の子供の時分には、たいていの家には、かならずこの絲車が一挺づゝはあつたものである。絲車で絲を紡ぐあのねむそうな音は、まだ多くの人の記憶に残つてゐるに違ひない。ところが四十年後の今日はどうだらう。どんな田舎に行つても、絲車はもはや物置の隅にさへ、滅多に見ることはできぬ。

しかしながら四十年前に、絲車を廻してゐるお婆さんに、四十年後にはこの絲車が紡績機械に變はると云つたなら、恐らく一笑に附したに違ひない。ところが今日吾々の着てゐる綿布は、ことごとく紡績機械によつて生産されたものである。そして何人もこの變化を怪しむ者がない。

「お婆さんは絲車の永久性を信じてゐた」かように四十年前のお婆さんは、絲車は未來永劫、人間が絲を生産する唯一の方法であると思ひ込んでゐた。そして若しこの絲車をこわしたなら、人間は、もはや絲を造ることはできぬと信じてゐた。ところが今日では、この絲車は、五百年千年前の珍奇な品物と同じように、博物館に陳列されるものとなつたのである。

絲車と紡績機械、これは大なる變化である。然しよく考へて見ると、この變化には、まだく重大な意義のある變化が含まれてゐる。

【この變化は社會關係を一變した】絲車で絲を紡いでゐる時代には、めいゝの家庭に絲車があつて、家庭の一員が畑から取り入れた綿を絲に紡ぐ。そしてその絲は、娘が手織木綿に織つて一家族の使用に供する。かように絲が生産せられて消費されるまでの、すべての過程は、一族の内部で行はれてゐたのである。ところが紡績機械の時代になると、事情は一變する。紡績機械の場合には、第一に紡績機械や、工場や、原料の綿花を所有する資本家がある。第二には、これ等の資本家に労働力を買はれて働らく男女の労働者がある。第三には、この絲を買つて使ふ消費者がある。そして絲が生産せられてから、最後の消費者の手に渡るまでには、その中間にいる

いろいろの種類しゆるるの商人しやうにんがある。仲買人なかがひにんがある。卸商人おろししやうにんがある。小賣商人ことうりしやうにんがある。それから銀行家ぎんかうかがある。そしてこれ等らの人々ひとぐが絲いとの生産せいさんにどういふ關係くわんけいをもつてゐるかといふことで、これ等らの人々ひとぐの間に社會的あひだの階級かいきふが分かれてくる。そして絲車いとぐるまの場合はうひには、出來上できあがつた絲いとは全部ぜんぶその家族かぞくの所有いうに歸きしたが、紡績ほうせきの場合はあひには、出來上できあがつた絲いとは、これを生産せいさんした労働者らうどうしやが全部ぜんぶ自分の物ものとするわけではない。否いな労働者らうどうしやは賃銀ちんぎんとして、僅かわづにその一少部分せうぶぶんにしか相當きうたうせぬ金額きんがくを受け取るのであつて、資本家しほんかはそのうちから、資本しほんの利息りそくと企業きげんに對する報酬ほうしうを取る。會社くわいしやの重役ちゆうやくは賞與金しやうよきんを取とる。事務員じむいんは月給げつきふを取とる、商人しやうにんはそのうちから商業しやうげんの利得りとくを取とるといふあんばいに、絲いとはそのままには分配ぶんぱいせられぬが、貨幣くわへいに形かたちを代へて、いろ／＼の階級かいきふの人々ひとぐの間に分配ぶんぱいされる。即ちこゝに分配ぶんぱいの問題もんだいが起つてくる。この分配ぶんぱいに關聯くわんれんして賃銀問題ちんぎんもんだいが起こり、労働問題らうどうもんだいが起こつてくる。(正確せいかくにいへば、労働者らうどうしやの賃銀ちんぎんは、資本家しほんかの資本しほんの中から支拂しはらはれるのであつて、この労働らうどうによつて現けんに生産せいさんせられた生産物せいさんぶつの分配ぶんぱいにあづかつてゐるものではない。云いひかへれば労働者らうどうしやの賃銀ちんぎんは、この労働らうどうの生産物せいさんぶつの中から支拂しはらはれるのではなくて、それ以前いぜんの労働らうどうの生産物せいさんぶつの中から支拂しはらはれてゐるものである)。

かように絲車が紡績機械になつたといふことは、單に絲を生産する生産技術の上の變化であるが、生産技術の變化の結果は、生産の組織、したがつて經濟組織、したがつてまた社會組織の全體の上に變化を生じてくる。即ち生活の資料を生産し、分配し、消費するまでの道行きと仕組みとが、すつかり變つてくる。そしてこれに伴うて、今まで無かつたいろくの社會的階級の分裂や對立ができ、今まで無かつたいろくの問題が起こり、今まで無かつたいろくの社會現象が起つてくる。即ち社會の經濟上の組織、組立てが全く一變し、これに伴うて、その上に築づかれてゐる社會の組織全體が一變する。多くの人は、絲車から紡績機械への變化を見て、少しも怪しまぬ。けれどもこの變化に伴つて、實は經濟の組織、したがつて社會の組立てといふものは、根柢から一變されたのである。

(こゝには分りよく説明するために、絲車から紡績機械への變化だけを、その他の生産の部門から切り離して考へたが、實際には、いろくの生産の部門における技術のなかで、たゞ絲の生産だけが、絲車から紡績機械に變化するようなことはない。蒸汽機關が發明せられた結果は、絲を生産する技術の上ばかりでなく、多かれ少なかれ、すべての生活資料、少なくとも多くの主要

な生活資料を生産する産業部門の技術の上にも、これと同じ變化を引き起こす。即ちその社會の生産を全體として見て、生産技術の水準を變化する。またそれでこそ、生産技術の上を起こつた變化の結果として、社會の經濟組織が一變し、したがつて社會の組織組み立てが一變するのである。かりにその他のすべての生産技術に變化がなく、たゞ絲車から紡績機械への變化が、全然孤立した事實として起こつたとしたならば、もちろんそれでも、社會の經濟の組織の上には、或る程度の部分的な影響を與へるには違ひないが、それが爲めに社會組織を根柢から一變することはない。

【經濟組織は變化する】すでに絲車の經濟制度が變化した以上は、紡績機械の經濟制度が變化したからと云つても、少しも不思議はない。今日の資本主義の經濟組織が永久不變であると思ふのは、ちようど四十年前に、お婆さんが絲車の永久不變を信じたのと同じことである。そして現在の經濟の組織、現在の社會生活の組立てが倒れたなら、人間はもはや生活できぬかのよう
に思ふのは、絲車が無くなれば、もはや人間は絲を紡ぐことが出来なくなると思ふてゐたのと同じことである。

(十五) 闘争の生活

【正義は變化する】吾々は今日の社會生活には、幾多の不合理のあることを見た。幾多の缺點と弊害とのあることを見た。それは最早や、吾々の正義の觀念を満足させることが出來ないことを見た。

如何なる時代の人間でも、正義の觀念をもつてゐる。正義の觀念をもつてゐることは、千年前の人間と今日の人間と、少しも變りはない。しかし何を正義とするかといふ、正義の觀念の内容實質は變化する。たゞに變化するばかりでなく、時には全く、正反對になつてくる。五十年前に正義に反してゐた事が、今日は正義の觀念に當てはまることになる。それと同じく、百年前の正義であつて、今日では吾々の正義の觀念が、とうてい許すべからざるものが幾らもある。

【正義は生活の條件と共に變化する】かように正義の觀念の内容實質が變化するのは、最後まで推しつめて考へると、吾々が如何にして生存をするかといふ、社會生活の仕方が變つた

からである。吾々の正義とは、畢竟するに、より善く生活することである。一人々々がより善く生活するといふことではなくて、社會全體がより善く生活することである。これが吾々の正義の要求であつて、これに反したものは、吾々の正義の觀念に反したものとなる。そこで如何にしてより善く生活できるかといふ事情が變つてくれば、勢ひ吾々の正義の觀念の、内容實質も變つてくる。

〔支配階級の正義と被支配者の正義〕

したがつて一つの社會が、全く利害の相反する二つの階級に分裂すると、勢ひその社會には、二つの異つた正義の觀念が出來上ることになる。

或る經濟の組織——たとへば資本制度——が、まだ進歩し成長をしてゐる新しい生産の組織であり、新しい生産力を代表した制度であつた時代には、資本主義の經濟は、まだかなり有効に社會全體を給養するだけの力を持つてゐた。この時代にも、社會はもちろん、利害の相反した二つの階級——搾取者の階級と被搾取者の階級、すなはち支配階級と被支配階級——とに分れてはゐるが、この二つの階級の間の對立と矛盾とが、まだそれほど著るしくなかつたので、一般に支配階級——現状維持を利益とする階級——の正義の觀念は、被支配階級——現状打破を利益とする階級——の正義の觀念は、

級——の頭を支配してゐたのである。

【新興階級の正義】　ところがこの經濟制度が、もはや上り坂の時代を通り過ぎ、かつては新しい生産力を代表してゐるものに反して、却つて新しい生産力の伸びる障礙となり足械となる時代になると、この新しい生産力を代表する新興階級と舊るい生産關係の階力を代表する階級との間の利害の對立衝突は、もはや緩和すべからざるものとなる。そして新しい生産力を代表する新興階級の間には、だんぐと獨立した正義の觀念が出來上つてくる。たとへば同盟罷工の如き行動にしても、ほんの近頃まで、一般に（労働者自身すらも）これを罪惡視してゐたにも拘らず、今日は、労働者はこれを當然の權利と信ずるようになった。

かうなると、利害の相反した二つの階級の間には、たゞに異つた利害が相ひ對立してゐるばかりでなく、異つた正義の觀念が相ひ對立することになる。一方の階級の正義の觀念から見れば、現状を維持することは第一の正義である。ところが新しい生産力を代表して、社會の底の方から頭を擡げてゐる新興の階級が、やがて階級的に成長し成熟してくると、もはや舊るい制度と舊るい秩序とを代表してゐる支配階級の正義の觀念に支配され、盲從してゐることを肯んじない。新

興階級は、もはや滅びゆく階級の正義の念をそのまま受け入れて、これを自分の正義の概念とはしてゐないで、漸次に新興階級に獨特な、獨立した正義の概念を確立する。そしてこの新しい正義の觀念に當てはまつた生活をするこの出来るような——即ち、より善く生活することの出来るような——新しい社會生活の組織組立てを要求するようになる。そこで新しい正義は、舊るい正義と衝突する。

人間社會の進歩は、常にこの新しい正義の勝利によつて行はれるものである。なぜならば、新しい正義の觀念は、如何にして社會全體がよりよく生活することが出来るかといふ事實の上につた變化に伴うて形成せられたものであり、その新しい方法を代表するものだからである。

【生活は闘ひである】生活は闘ひである。けれども新しい生活への闘ひは、自分の頭と闘ふ闘ひではなくて、新しい正義の觀念に反した生活を強ふる環境と、この環境を維持してゐるいりくの勢力とに對する闘ひである。より善き生活への闘ひは、偽瞞と回避とによつて、自分を舊るい環境に順應させてゆくことではなくて、反對に、吾々が如何にして活きるかといふ社會生活の有様を、新しい正義の觀念に順應せしめることに外ならぬ。

北浦千太郎著

(定價十錢、送料二錢)

新刊 改良主義の社會的根據

改良主義日和見主義の徹底的曝露

無産階級運動に於ける左右兩翼の對立、無産者の代表者類をしてその實ブルジョアの手先を極める右翼官僚幹部と、眞に無産者の利益を代表して勇敢に闘争する左翼との對立闘争は日本の社會運動の現在の段階である。吾々はこの右翼官僚幹部を徹底的に掃蕩しなければ光ある未來へ進むことは出來ない。而もこの思想は無産若運動の内部に入つて來るか。その思想的根據は何であるか。何故にそれが無産大衆の間に入つて來るか。それを突き止めなければ我々之と闘争し之を克服する事は出來ない。右翼幹部等の振り廻す理論、それは改良主義である。この改良主義の本書に於て徹底的に曝露されてゐる。

月刊 無産農民

定價十五錢 半年分八十錢

送料五厘 一年分一圓五十錢

◆本誌の使命

本誌は無産階級の解放を目標としての労働者と農民の團結を使命とする。

◆本誌の内容

可成的に研究的乃至は學究的理論を避け、實際的理論及び現實題目の批判を主とす。特に日本に於て重大な意義を有する農民運動の理論及び實際に力を注ぎ斯界の權威を以て目せらる。

LIBRARY OF CONGRESS



0 020 208 662 7

資本主義のからくり

(定價三十錢)
(送料二錢)

大正十五年十一月廿一日改訂五版印刷
大正十五年十一月廿三日發行

著者 山川均

發行人 大原健次

印刷人 國府田信一郎

東京市牛込區山吹町五〇

發行所 建設社

東京市牛込區原町三ノ二五
振替東京六〇六〇七

345004

332.04

002011

Library of Congress, Asian Division

[211] shihonshuginokar008800_0

00202086627

Jan 14, 2014

